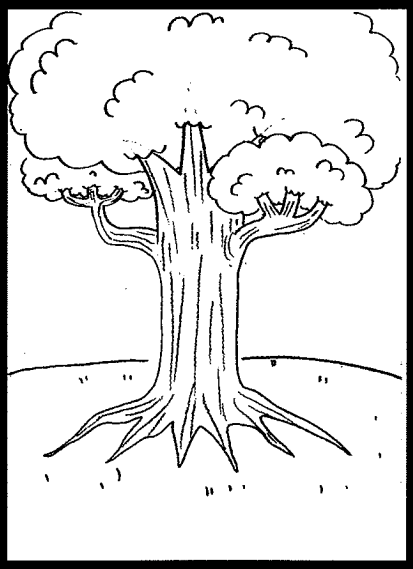
平成 15 - 16 年度　広島市立大学特定研究

国際学術研究B

研究報告書

神経症症状の出現様式と文化との関連について
―日中比較を通して―



平成１８年（2006 年）３月

広島市立大学国際学部　吉　沅洪

広島市立大学附属図書館
0002742892

361.4
キツ

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

研究１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
神経症症状と文化との関連について
―ＣＭＩとＳＤＳを用いた日中米比較―

研究２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
日中大学生の描画特徴、パーソナリティ特性比較と文化
―バウムテストを用いた実証的研究―

研究３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
文化と行為
―「引きこもり」に関する日本文化論的考察―

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
５名中国人大学生の事例

はじめに

日本人は所属集団（会社など）を中心とした人間関係に縛られていて、中国人は血縁を中心とした人間関係を重視している印象を持つ。日中それぞれの民族は特有の文化を持ち，その文化を背景とした対人関係の持ち方がある。歴史を背景として構築された文化が，民族特有の対人関係の有り様を創り上げ，その文化特有の不適応状態を醸成することが考えられ、人格の発達には文化を背景とした対人関係の有り様が大きく影響することから、文化を背景とした神経症の構造も存在するように思われる。特に、臨床心理学的、精神医学的視点から神経症症状の出現様式を明らかにすることによってはじめて、それぞれの文化圏において治療効率の高い治療技法の考案がようやく可能となる。

日本人は「枠」に拘る。日本語の「内」と「外」、「裏」と「表」、「本音」と「建前」は連動しており、「枠」によってもたらされた対人関係である。中国人は血縁に拘り、対人関係おいては「面子」を重視する。内閉神経症と視線恐怖症は日本文化特有のものであると言われており、「裏」と「表」に関係すると思われる。一方、中国人は直接身体に症状として出現する重症の心身症が多く、これは面子への強い拘りと関係していると考えられる。そしてアメリカ人は抑うつ神経症が多いと言われている。このような神経症症状の出現様式の違いはそれぞれの文化特有の対人関係と密接に関係している。

また、異文化間臨床心理学の実践を行っている心理臨床家の事例研究によると、異文化適応のプロセスにおいて喪失感、劣等感やアイデンティティの混乱などから、不眠、円形脱毛、胃潰瘍などのような心身症的症状が現れることが多いことが報告されている。2001年10月～2002年３月、筆者は広島市立大学の学長指名若手研究者海外研修派遣によって米国のカンザス大学に滞在したが、その際、多様な文化を背景とするアメリカ人を対象に心理的な援助を行う際には、文化という要素は常に配慮しなくてはならないほど重要なものであると痛感した。

本研究は日本人、そして中国人の神経症症状の出現様式がどのように異なっているか、さらに文化特有の対人関係の持ち方とどのように関連するかについて考究する。具体的には、ＣＭＩ健康調査票、ＳＤＳ（うつ自己評価尺度)、バウムテストを用いて日本、そして中国の大学生を対象に調査し、神経症症状、描画特性を比較することによって両者の違い、および関連を明確化する。また、これら症状の出現様式の違い、バウムとの関連を比較することにより、それぞれの文化特有の対人関係との関連について、臨床心理学、ならびに精神医学の視点から考察する。

本報告書は３つの研究から構成されている。この３つの研究は「神経症と文化」というキーワードでつながっているが、内容の重複する部分をその都度省略せずに表記しているため、それぞれを独立した研究と見なすこともできる。

研究１は「神経症症状と文化との関連について―ＣＭＩとＳＤＳを用いた日中米比較―」である。ＣＭＩ健康調査票(Cornell Medical Index-Health Questionnaire)とＳＤＳ（うつ自己評価尺度、Self-rating Depression Scale）を用いた日中米比較調査を通して、神経症症状の出現様式と文化との関連について検討を行った。

研究２は「日中大学生の描画特徴、パーソナリティ特性比較と文化―バウムテストを用いた実証的研究―」である。投影法のバウムテストを用いて日本と中国の大学生を対象に調査し、描画特徴、及びパーソナリティ特性を比較することによって両者の違いを明らかにすることを試みた。これらの違いが各文化における対人関係のあり方とどう関連するのかを明確にした。

研究３は「文化と行為―「引きこもり」に関する日本文化論的考察―」である。固有の歴史を背景として構築された文化が，民族特有の対人関係の有り様を創り上げ，人々がその文化に適応できない場合に、文化特有の不適応状態を醸成することが考えられる。つまり人格の発達には文化を背景とした対人関係の有り様が大きな要因となるため、我々がその文化から隔絶した生き方をするのは困難である。このように我々が幼児期から馴染んできた文化に身を委ねることができなくなった時、特有の不適応症状を示すことになる。研究３は、日本において社会問題となっている「引きこもり」について日本文化論から考察した。日本文化ではとりわけ枠が重要視されており、この枠は個人が所属する家庭、学校、会社などのことである。この枠の中での対人関係が日本文化独自の問題を醸成する。ここでは、枠内構造についての考察を行い、さらに枠からの出入り口としての裏口と表口の機能、本音と建前について論究した。そしてこれらが十分に機能しないことから、「引きこもり」が発生すると結論した。また、枠の階層性について説明し、力動のベクトルを外に向けることが、引きこもりの治療であること事例を通して説明した。

最後に、中国人大学生５名（男子２名、女子３名）を対象にインタビュー調査を行った結果をまとめて資料として載せておきたい。調査の際には、ＣＭＩ→ＳＤＳ→バウムテスト（Pre）→ロールシャッハテスト→バウムテスト（Post）というテストバッテリーを用いた。調査結果に関する総合的な所見を示しておくが、詳しい事例検討については今後の課題として残したい。

研究１

神経症症状と文化との関連について

―ＣＭＩとＳＤＳを用いた日中米比較―

要約

本研究では、日中米比較調査を通して、文化と神経症症状との関連について検討を行った。中国人の場合は、日本人に比べてCMIの結果から身体症状が高くなることが明らかになった。また、日本人の場合はSDSの得点値が中国人に比べて明らかに高いことが明確になった。つまり、中国人の神経症の特徴は心身症傾向であり、日本人の場合は欝傾向であることを示している。これらは、先に述べた日中の対人関係の差異とそれに関連する神経症の出現パターンを裏付けるものである。本研究の調査はアメリカ人の神経症症状の傾向を明らかにすることができなかったので、今後の課題として残された。

キーワード：神経症、症状、文化、出現様式、比較研究

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　研究目的
Ⅲ　研究方法
Ⅳ　調査の結果
Ⅴ　結論および今後の課題
文献

Ⅰ　はじめに

中国人留学生は日本文化に適応していく段階において，重症の心身症になる人が多い（吉、2001）。また、上原（1988）は、精神的に不安定な異文化適応状態は心身症状に現れることがあるとしており、井上（2002）は留学生カウンセラーとして、相談を行ってまず第一に気づいたことが、留学生はこころの悩みを、身体的症状という形で表現することがかなり多いと指摘している。

大抵彼らはその症状が顕著で重篤な身体の病気として認識するまでは，自覚的であっても病気の症状として把握しないことが多い。しかも彼らは総じて明るく振る舞っており，

症状がストレスによるものであることを否定するのも大きな特徴である。つまり，「面」を被っており，「面」が感情を代用している。従って，被っている面，つまり自分の仮面に気づけないことがあるように思われる。仮面に気づけないことが，症状がストレスによるものと気づけない要因であるのかも知れない。つまり、迂闊に「面」を外すと「面子」に関わるゆえ，感情を押さえたり，装ったりする生活が，知らずと健康を乱す生活になり，ストレスが高まり，心身症を出現させているものと思われる。なぜこのような事態が生じるのであろうか。

先に日本人は家や所属集団（会社等）を中心とした人間関係に縛られていると述べた。それに比べて，中国人は血縁を中心とする人間関係である。つまり，中国では血のつながりさえあれば，すべての人が家族であると考える。中国人の自己紹介は，順番としては個が優先される。しかも家族の一人であっても常に家族の代表なのである。それ故、他人に対しては、必要以上に自分を見せないように関わらなければならなくなる。それらは面によっても推測される。日本人の「面」は「裏」を透かせてみせるための「薄い面」である。中国語の中に日本語の「表」「裏」と相応する「表(Biao)」「里(Li)」という言葉がある。しかし、中国語の「表」「里」はかなり貧弱であり，日本語の「表」と「裏」ほど機能的ではない。その代わりに，「面子(Mianzi)」という重要な言葉があり，熟語も多い。「面」の同義語として「臉」があるが，実際には大きく異なる用い方がなされる。これは特に面目を保つことを意味する。面子は他者が存在する限りにおいて，その関係を通して生じる自己尊重の要求である。自分と相手の「面子」をお互いに守ることは，むしろ一種の暗黙の了解である。また，「里」は大変近づくことが難しい，他人に決して見せないものである。その「里」を外に見せないために「面子」が必要であり、面子を保つ行為が心身症を誘発させるものと考えられる。

人格の発達は文化を背景とした対人関係の有り様が大きく影響していると同様に、文化を背景とした神経症の発症の構造があるように思われる。特に、臨床心理学的、精神医学から神経症の発症の構造を明らかにすることによって文化特有の対人関係のあり方と神経症との関連を解明していき、それぞれの文化圏において治療効率の高い治療技法の考案が可能となる。このように神経症症状と文化との関係、文化と治療についての本格的な研究は殆ど例を見ることがないのである。

II　研究目的

本研究では、質問紙法を用いて日中米比較調査を通して、文化と神経症症状の出現様式との関連について検討していく。

III　研究方法

1．調査の用いた尺度

調査に用いた心理検査はＣＭＩ健康調査票(Cornell Medical Index-Health Questionnaire は

1949 年米国の心理学者 K.Brodman によって開発され、人間の心身両面にわたる自覚症状を調査する質問紙法である)とＳＤＳ (Self-rating Depression Scale は 1965 年に WWK.Zung によって発表された評価尺度で、被検者の自己評価により、迅速かつ簡便に抑うつ度を数量的に把握できる質問紙法である）である。

２．調査対象

合計 1,128 名の日中米大学生が調査対象となった。日本人大学生は合計 452 名（平均年齢 19.02 才、標準偏差 SD=1.24、男子 239 名、女子 213 名）であり、中国人大学生は合計 318 名（平均年齢 20.19 才、標準偏差 SD=1.18、男子 107 名、女子 210 名,未記入 1 名）であり、アメリカ人大学生は合計 358 名（平均年齢 20.11 才、標準偏差 SD=4.62、男子 194 名、女子 161 名,未記入 3 名）であった。なお、調査は無記名式で行った。統計処理は統計パッケージソフト SPSS によって行った。

３．調査の実施

調査は 2003 年 10 月～2004 年 4 月に実施された。ＣＭＩとＳＤＳはそれぞれ日本語版、中国語版、英語版が使用された。筆者は３つの国へ出かけ、調査を行った。

Ⅳ　調査の結果

１．　調査の結果

（１）因子分析

ＣＭＩ、およびＳＤＳについては、主因子法を用いて因子分析を行った。Promax 回転後、固有値の変動状況、因子の解釈のしやすさなどを考慮して、日中米とも３因子が抽出された。ＣＭＩの２因子はそれぞれ「精神の健康」因子と「身体の健康」因子と命名された。ＳＤＳの２因子はそれぞれ「ポジティブ・ムード」因子と「ネガティブ・ムード」因子と命名された。

（２）尺度の検討

ＣＭＩ、およびＳＤＳ尺度全体および因子ごとに、内的整合性を検討するためにα係数を求めた。Table 1 は日中米のＣＭＩ尺度の結果である。Table 2 はＳＤＳ尺度の結果である。表に示したとおり、日中米においてＣＭＩ、およびＳＤＳ尺度全体、および各因子のα係数、そして因子の間の相関も高く得られたため、尺度の信頼性を確認できたと言えよう。

Table 1

CMI's Means, Standard Deviations, Coefficient Alphas, and Inter-correlations of Factor 1, Factor 2 for the Three Ethnic Groups

Measure	M	SD	α	Menal	Body
		Japanese (n=452)			
CMI (total)	28.19	16.72	0.89	0.61	0.57
Mental Health	10.36	7.71	0.83		0.62
Body Health	17.83	10.83	0.84		
		Chinese (n=318)			
CMI (total)	33.49	19.01	0.9	0.68	0.65
Mental Health	11.09	7.89	0.85		0.63
Body Health	22.51	12.89	0.84		
		American (n=358)			
CMI (total)	18.78	14.66	0.85	0.57	0.53
Mental Health	5.27	6.25	0.78		0.55
Body Health	13.51	10.24	0.81		

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

Table 2

SDS's Means, Standard Deviations, Coefficient Alphas, and Inter-correlations of Factor 1, Factor 2 for the Three Ethnic Groups

Measure	M	SD	α	Positive	Negative
		Japanese (n=452)			
SDS (total)	36.26	6.61	0.98	0.72	0.78
Positive Mood	15.57	3.81	0.98		0.77
Negative Mood	20.69	4.51	0.96		
		Chinese (n=318)			
SDS (total)	33.53	7.31	0.81	0.51	0.44
Positive Mood	17.25	4.66	0.82		0.45
Negative Mood	16.28	4.15	0.72		
		American (n=358)			
SDS (total)	29.09	6.99	0.78	0.25	0.27
Positive Mood	16.69	5.33	0.82		0.24
Negative Mood	12.41	3.49	0.72		

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

（３）ＣＭＩとＳＤＳとの関連

まず、ＣＭＩ尺度とＳＤＳ尺度の相関分析を行った結果、日中米とも尺度全体、および因子の間に有意な相関が得られた（Table 3）。

Table 3

Correlations among CMI and SDS for the Three Ethnic Groups

Measure	SDS (total)	Positive Mood	Negative mood
		Japanese (n=452)	
CMI (total)	0.59 (***)	0.65 (***)	0.31 (***)
Mental Health	0.49 (***)	0.55 (***)	0.26 (***)
Body Health	0.58 (***)	0.64 (***)	0.29 (***)
		Chinese (n=318)	
CMI (total)	0.57 (***)	0.43 (***)	0.55 (***)
Mental Health	0.48 (***)	0.34 (***)	0.49 (***)
Body Health	0.58 (***)	0.46 (***)	0.51 (***)
		American (n=358)	
CMI (total)	0.42 (***)	0.25 (***)	0.46 (***)
Mental Health	0.33 (***)	0.16 (**)	0.42 (***)
Body Health	0.44 (***)	0.31 (***)	0.41 (***)

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

次に、日本、中国、アメリカにおけるＣＭＩ尺度全体および各因子、ＳＤＳ尺度全体および各因子の得点の平均値を GLM 法による多重比較を行った。その結果ＣＭＩ尺度および各因子においては、中国人大学生、日本人大学生、アメリカ人大学の間に有意な差が見られた。つまり、中国人大学生の得点は有意に日本大学生より、そして日本人大学生はアメリカ人大学生より高い結果となった。そして、ＳＤＳ尺度および各因子においては、日本人大学生、中国人大学生、アメリカ人大学生の間に有意な差が見られた。つまり、日本人大学生の得点は有意に中国人大学生より、そして中国人大学生はアメリカ人大学生より高い結果となった。

Table 4

The Results of GLM Analysis of CMI and SDS for all Three Ethnic Groups

Measure	Country Difference	F
CMI (total)	Chinese>Japan>American	60.67 (***)
Mental Health	Chinese>Japan>American	57.56 (***)
Body Health	Japan・Chinese>American	70.72 (***)
SDS (total)	Japan>Chinese>American	107.52 (***)
Positive Mood	Japan>Chinese・American	106.78 (***)
Negative Mood	Chinese>Japan>American	81.53 (***)

* p<.05. ** p<.01. *** p<.001.

Ⅳ　結論および今後の課題

中国人の場合は、日本人に比べてＣＭＩの結果から身体症状が高くなることが明らかになった。また、日本人の場合はＳＤＳの得点値が中国人に比べて明らかに高いことが明確になった。つまり、中国人の神経症の特徴は心身症傾向であり、日本人の場合はうつ傾向であることを示している。これらは、先に述べた日中の対人関係の差異とそれに関連する神経症の出現パターンを裏付けるものである。

本研究の調査はアメリカ人の神経症症状の傾向を明らかにすることができなかった。今後の課題として、アメリカの文化、対人関係のあり方について文献研究をし、より適当な尺度を用いて調査を行っていく必要があるであろう。

＜付記＞

本論文は、「Appearance Pattern of Psychoneurosis Symptoms and Cultures」というタイトルで2005 APA Convention, Washington DC, Aug 18-21(2005)で行った学会発表に基づいてまとめたものです。

文献

Bordman, K., Erdmann, A.J., Lorge, I. And Wolff, H.G. (1949). "The Cornell Medical Index: An adjunct to medical interview". The Journal of the American Medical Association, 140, 530-534.

井上孝代　(2002)　心理学と多文化間精神医学の協働．文化とこころ，1(1)：16-24.

Ji, Y., Sakaki, T. (1999) "A study of culture and neurosis between Japan and China in view of language". "People・Culture・Psyche" Research of Human Studies, Kyoto Bunkyo University, 2, 69-81.

吉　沅洪　(2001)　ロールシャッハのW反応から見た在日中国人の把握様式．文化とこころ，5，137-145.

Doi, T. (1985). Ura and Omote. Koubudou

Zung WW. (1965). "A Self-Rating Depression Scale". Arch Gen Psychiatry. Jan, 12:63-70.

上原麻子　(1988)　留学生の異文化適応言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究．広島大学教育学部紀要，111-124.

Appearance Pattern of Psychoneurosis Symptoms and Cultures

Abstract:

In this research, we studied the differences in the appearance patterns of symptoms of psychoneurosis between Japanese, Chinese and Americans, and how these differences are related to their own cultures. We make it clear that psychosomatic disorder characterizes the psychoneurosis in Chinese culture. In other words, Chinese people tend to have symptoms of mal-adjustment and anxiety through some physical diseases such as insomnia and indigestion. Japanese people, who are able to distinguish and perform the roles of "Uchi" and "Soto", "Ura" and "Omote" well, are adaptable. Specifically, "Hone" and "Tatemae" function well. It is easy to develop depression for those who are not good at distinguishing and performing the roles of "Uchi" and "Soto", "Ura" and "Omote". The appearance patterns of symptoms of psychoneurosis for Americans are still unclear from the present research. It is necessary for further investigation to look into it in the near future.

Keywords: psychoneurosis, symptoms, culture, appearance pattern, a comparative study

研究２

日中大学生の描画特徴、パーソナリティ特性比較と文化

—バウムテストを用いた実証的研究—

要約

本研究はバウムテストを用いて日本人と中国人の描画特徴、パーソナリティ特性の差異について比較し、そしてその差異が日中の文化特有の対人関係との関連について考察を試みた。調査対象となったのは、日中の大学生 252 名（日本人 132 名、中国人 120 名）であった。その結果、中国人の場合は木以外に、背景や様々な付属物が描かれることが多かった。付属物の加筆は木以外のものに注意を向けようとするものと思われる。そして、根元を閉じられた線で描く傾向もその内容、中身、つまり不安を隠すための防衛と思われる。この結果は中国文化の「面子」と関連していると考えられる。また、日本人は中国人に比べて樹冠を黒く塗り、幹に縞模様を描く傾向が多く見られた。幹に縞模様を描くことは感受性であり、木を黒く塗ることはうつ傾向の表現であると解釈されているため、これは日本文化の「枠」と関連している。

キーワード：パーソナリティ特性、描画特徴、文化、バウムテスト、日中大学生

目　次

Ⅰ　目的と方法

１．はじめに

①日本文化に見る「うち」と「そと」、「裏」と「表」、「枠」及び特有な神経症

②在日中国人留学生の心身症状と「面子」

③パーソナリティ特性、対人関係の持ち方と文化

２．研究目的

３．研究方法

①　バウムテストについて

②　治療場面におけるバウムテストの役割

③　調査の実施

Ⅱ　バウムテストの調査結果及び考察

１．バウムテストの分析基準

２．バウムテストの調査結果

３．考察
Ⅲ　結論と今後の課題
文献

Ⅰ．目的と方法

１．はじめに

対人関係のあり方やコミュニケーションのスタイルはそれぞれの文化によって異なる（鈴木、1997）。日本と中国では、それぞれの文化を背景とした対人関係の持ち方がある。日本人は所属集団（会社など）を中心とした人間関係を重視するのに対して、中国人は血縁を中心とした人間関係を大事にしている（吉、1999）。また、日本人は「枠」に拘り、中国人は「面子」に拘る（吉・酒木、1999）。「枠」は「うち」と「そと」に分ける機能を持つ。「枠」づけられた「うち」を「そと」からのぞき見ることは非常に難しく、逆に「うち」から「そと」へ出ることも容易ではなく、常に「うち」の中でのまわりの反応を意識しなければならない。

①日本文化に見る「うち」と「そと」、「裏」と「表」、「枠」及び特有な神経症

日本人は自分の所属する集団を「うち」と呼ぶのも特徴の一つである。自分の所属する会社や学校をうちの学校、うちの会社として主体化して捉える。「うち」は一人称であり、「私」である。そして相手の学校や会社は「よそ」あるいは「そと」となる。このように主体化することによって「内のもの」と「外のもの」との区分けが生まれてくるのである。このような「内」の中でのことは、「外」に漏れないように保持するのである。そこで、具体的に「裏」と「表」、「本音」と「建前」が機能してくることになる。土居（1985）は「裏」と「表」について、「表は見えるが、裏は表のかげに隠れている。表はただ表をだけを表すのではなく、また裏を隠すためだけのものでもなく、裏を表現するものでもある」とし、つまり「表なくして裏がなく、裏なくして表なく、両者は文字通り表裏一体である」と指摘している。このように「内の世界の対人関係」が日本文化を背景とした対人関係のあり方である。また土居（1994）は「何がオモテになり、何がウラになるかは、時と場合によって変わるし、時によってはオモテがウラになり、ウラがオモテになることもある。お互いに相補う関係にあることが重要な点である」と指摘している。つまり、表と裏は一見相反するようであるが、状況によって流動的な側面を持っている。

また、酒木（1996）によれば、思春期の「引きこもり」は「内の中」に「外」を作り続けた結果であると指摘している。「内」が出来れば、これまでの「内」が「外」になっていくのである。つまり、「外」の階層化が発生する。「内」から外を過剰に伺えば、「外」からの侵入を意識することになるため、その度合いによって「引きこもり」が強化されると考えられる。

②在日中国人留学生の心身症状と「面子」

一方、中国人留学生は日本文化に適応していく段階において，重症の心身症になる者が多い（吉、2001)。上原（1988）は、精神的に不安定な異文化適応状態は心身症状に現れることがあるとしており、井上（2002）は留学生がこころの悩みを、身体的症状という形で表現することが多いと指摘している。大抵彼らはその症状が顕著で重篤なものとして認識するまでは，例え自覚的であっても病気として把握しないのである。しかも彼らは総じて明るく振る舞い、症状がストレスによるものであることを否定する。この身体症状は中国文化を理解するためのキーワードである「面子」と関連している。

「面子」は、体面、名誉、顔を意味する。中国語で「講面子」「愛面子」「要面子」はすべて体面を重んじることであり、面子をたてることである。「面子」は他者との相互活動によって直接相手に対して生じるものであり、個人が他者ないし社会に対して示すものである。個人の面子に対する要求はいわゆる一種の自己尊重への要求でもある。面子は相手、つまり他者が存在する限りにおいて、その関係を通して生じるものである。つまり、自分と相手の「面子」をお互いに守ることは、むしろ一種の暗黙の了解である。それは決して傷つけてはいけないものであり、大切に保管される「仮面」である。従って、「面」を被っており，自分の仮面に気づけないことがあるように思われる。迂闊に「面」を外すと「面子」に関わるゆえ，感情を押さえたり，装ったりする生活が，知らずと健康を乱す生活になり，ストレスが高まり，心身症を出現させているものと思われる。

③パーソナリティ特性、対人関係の持ち方と文化

以上の視点から人格の発達は文化を背景とした対人関係の有り様が大きく影響していると同様に、文化を背景とした神経症の発症の構造があるように思われる。特に、臨床心理学的、精神医学から神経症の発症の構造を明らかにすることによって文化特有の対人関係のあり方と神経症との関連を解明していき、それぞれの文化圏において治療効率の高い治療技法の考案が可能となるように思われる。しかし、現在のところこのような神経症症状と文化との関係、文化と治療に関する調査データに基づく実証的な研究が少ない。

少ない研究の中でも、例えばTseng（2003）はアメリカ人、ロシア人、日本人と中国人のパーソナリティの比較研究を行い、文化的な不安、文化的なパフォーマンス、表現の限界及び社会文化の差別などについて文化と精神病理学の視点から考察を行った。また、Ji（吉，2005）は心理検査を用いて神経症症状と文化との関連について調査を行った。調査結果としては、中国人は日本人に比べて身体症状が高くなり、日本人は中国人に比べてうつ尺度が明らかに高いことが明確になった。つまり、中国人の神経症の特徴は心身症傾向であり、日本人の特徴はうつ傾向である。これらは、先に述べた日中それぞれの対人関係の差異とそれに関連する神経症の出現パターンを裏付けるものである。

文化人類学の領域では、Linton（1945）がそれぞれの社会で基本的なパーソナリティパ

ターンが存在すると主張した。しかし、Segall らは（1990）は文化とパーソナリティ研究において、社会内の個人差を考慮に入れなかったことを指摘し、特に比較文化心理学においては方法論が非常に重要だと考え、パーソナリティと文化に関する研究方法を投影法に頼りすぎて、人々を臨床的に分析する傾向はこの領域の研究の欠陥であると述べている。そこで、Holtzman（1979）はこれまでのパーソナリティと文化に関する研究おいて投影法を用いた研究を総括している。これらの研究において、言語に頼る投影法の有効性が認められてはいるが、ジレンマも同時に存在する。つまり、調査が行われた言語環境、調査で得られたデータを分析するシステムなどについて慎重に設定しなければならないのである。

筆者は先行研究を踏まえた上で、文化的な差異による表現の基礎研究として日本人と中国人の描画特徴、及びパーソナリティ特性がどのように異なっているか、さらに文化特有の対人関係の持ち方とどのように関連するかについて考究する。また、これらパーソナリティ特性の違いについて実施に当たって言語に頼る部分の少ない投影法であるバウムテストを通して比較し、それぞれの文化特有の対人関係との関連について臨床心理学の視点から考察を試みる。

2．研究目的

本研究では、投影法のバウムテストを用いて日本と中国の大学生を対象に調査し、描画特徴、及びパーソナリティ特性を比較することによって両者の違いを明らかにする。これらの違いが各文化における対人関係のあり方とどう関連するのかを明確にする。

3．研究方法

①バウムテストについて

スイスでは昔から心理的診断に樹木画を使用してきた。その伝統を受け継ぎ、これをバウムテストとして集大成したのが Koch（1952）であった。Koch とほぼ同時期に、アメリカの Buck が”The H-T-P Technique を提唱し、彼もまた樹木画に注目している。樹木画の有効性について、Buck（1948）は、「樹木画には、self-portrait が描かれ、人物画よりも連想が早く、自己防衛も低く、よい投影テストである。」と述べている。

本研究は、バウムテストの結果を被験者１人１人に対して臨床的に分析を行わず、あくまでも客観的に決まった指標に基づいて、複数の研究者によって統計的な処理を行うことによって、１つの文化、社会のメンバーの間には共有されている特徴を明らかにしていくことを目的とする。

バウムテストの日本への導入は 1960 年頃である。それまで、日本において投影法の研究はロールシャッハ法が主流であったが、表現学や筆跡学が注目されはじめると、バウムテストが臨床場面に導入されるようになった。1970 年代以来急速に臨床現場に普及し、その有効性が認識され、今日に至るまであらゆる機関で使用、研究されている。

②治療場面におけるバウムテストの役割

バウムテストは投影法の一種である。投影法は、被験者のパーソナリティの特徴を、内面に潜在する願望や感情や葛藤の様相にいたるまで、できる限り豊富に導き出すことを目指す。そのためには、被験者が表面的・形式的な応答で済ませたりできないような課題を設定する工夫が必要である。投影法の刺激素材の条件として、多少とも未分化、未組織、不完全、多義性、あいまいさを備え、被験者固有の素質に基づいた判断や想像（意味づけ）を加えなければ完成されない性質をもつことが言われている。そしてこのような刺激に対して被験者がどのように反応するか、それによって性格傾向や願望や葛藤などが多く反映されることになる。

③調査の実施

(1)調査時期

2003年10月～2004年4月に実施した。

(2)調査対象

中国西南師範大学に在学しており、「発達心理学」を受講している中国人大学生 120 人（Mean=20.19、SD=1.18、男子56名、女子64名）、日本広島市立大学に在学しており、「心理学」を受講している日本人大学生132人（Mean=19.02、SD=1.24、男子61名、女子71名）、合計 252 名であった。なお、調査は無記名式で行った。統計処理は統計パッケージソフトSPSSによって行った。

(3)バウムテストの教示

バウムテストは、「木を一本描いて下さい。」という教示によって始める。用いたのはＡ４の画用紙と４Ｂの鉛筆である。この時、コッホのいうように「実のなる木を描いてください」とはしない。なぜなら、コッホのように周囲に針葉樹の多い地方で行う場合には、バウムテストにおいて適しているとされている広葉樹を描くことを、強制することなしに描いてもらうためには「実のなる木を描いてください」という言葉は有効であるが、日本でいう「木」とは一般的に広葉樹を指す場合が多いため、日本人に対して「実のなる木を描いてください」というと、逆に実を描くことを強制しているかのように受けとられてしまう可能性があるからである。

また、この教示の他にも、「絵の上手、下手を見るのではない」、「写生ではなく、思った通りに描く」、「できるだけ丁寧に描く」、「時間は自由である」、「となりの人の絵を見たり、邪魔をしたりしない」ということも付け加える。

なお、本研究の調査の実施については、筆者が直接日本、及び中国の大学教室に出向き、日本語、及び中国語を用いて同じ教示を行った後、描画してもらった手続きを踏んだ。

Ⅱ　バウムテストの調査結果及び考察

１．バウムテストの分析基準

バウムテストは非言語的な、イメージ表現型のテストであるため、ある程度指標に当てはめて判断しなければならない。青木（1986）は丁寧さの指標、不安指標（緊張感、イライラを与える、陰気な感じ)、ゆがみ指標（形の崩れ、乱れ、奇妙さ、不均合，不格好）と貧困指標に基づいて分析を行っている。そして、おおよその適応度として、丁寧さの指標は、少し神経質から神経症のあたり、歪み指標は神経症から精神病のあたり、不安指標はその中間、貧困指標はなんらかのうつ状態と指摘している。また、宮崎ら（1987）は正常群と精神分裂病群のバウムテストの比較研究において、不自然傾向因子、立体化傾向因子、細分化傾向因子という３因子構造を見いだしている。

本研究は描画特徴と神経症の発症構造との関連に焦点を当てて考察することを目的としているため、De Castilla（1994）が作成した「バウムテストに表れるサインと精神症状の関係」から神経症指標、つまり外向、内向、不安、神経過敏、抑うつと攻撃性という６つの指標を取り上げて統計処理を行った（Table１)。

２．バウムテストの調査結果

本調査のバウムテストの評定は臨床心理学者３名によって行われた。その中の１名は臨床経験が豊かでバウムテストについて詳しい臨床家である。評定は「樹冠」、「茂み」、「枝」、「葉」、「幹」、「根元」、「根」、「地面」と「付属物」という９つの基準に基づいて行った。なお、評定は「０」、「１」で判断できるものを選択した。

表１に示したように、たとえば、「樹冠」なら、「扇状の」、「外に向かって広がった」、「重々しく垂れ下がった」、「抽象的でちぐはぐな形態をした・強調された」、「球型の」、「葉のない」という６つの下位基準にそれぞれ評定していく。そして、それぞれの下位基準でカイ二乗を行った後、基準ごとに分散分析を行うことによって日中差を検討した。その結果について、以下のように９つの基準に沿って結果を説明していく。

「樹冠」、「枝」、「葉」、「根」と「地面」という５つの基準においては、その描き方に明らかな日中差が見られなかったが、「茂み」、「幹」、「根元」と「付属物」の４つの基準においては、日中差が見られた。

「茂み」という基準で対比させると、顕著な日中差（$F(1,250)=11.168$, $p<.01$）が見られた。その下位基準を詳しく見てみると、日本人大学生の方が中国人大学生に比べ、「濃い陰影」、「豊かな」、「鬱蒼とした・ボリューム感のある・誇張された」茂みを多く描いている結果となった。そして、「幹」という基準で対比させると、日中差（$F(1,250)=8.111$, $p<.05$）あり、「鬱蒼とした・ボリューム感のある・誇張された」は外向、不安、神経過敏と抑うつが見られたのである。その下位基準を詳しく見てみると、日本人大学生の方が中国人大学生に比べ、「縞模様の」と「太く大きな」幹を多く描いている結果となった。「根元」という基準で対比させると、明らかな日中差（$F(1,250)=17.152$, $p<.01$）が見られた。その下位基準を詳しく見てみると、中国人大学生の方が日本人大学生に比べ、「濃い陰影」、「閉じられた」根元を多く描いている結果となった。さらに、「付属物」という基準で見ると、そ

Table1 バウムテストに表れるサインと精神症状の関係(De Castilla, 1994)

		外向	内向	不安	神経過敏	抑うつ	攻撃性
樹冠	扇状の						○
	外に向かって広がった	○					
	重々しく垂れ下がった					○	
	抽象的でちぐはぐな形態をした・強調された				○		
	球形の				○		
	葉のない						
茂み	黒々とした			○	○		○
	欠如		○				
	濃い陰影		○	○		○	
	下方に下がった				○	○	
	ボール型をした				○		
	対照的ライン構成					○	
	左側が切り落とされた						○
	完全に閉じられた		○				
	豊かな	○					
	鬱蒼とした・ボリューム感のある・誇張された	○		○	○	○	
	根元まで茂みとして表現される						○
	分裂した			○			
枝	下に向かった						
	ねじ曲がった						○
	葉のない			○			
	黒い・鋭くとがった						○
	管状の						○
	太い						○
	濃い陰影			○			
	交差する			○			
	単線の		○				
	水平に向き合った		○		○	○	
	反転した						
葉	欠如		○			○	
	手の形をした						
	ヒイラギの						○
	密生している			○			
	刺々しい						○
幹	縞模様の			○			○
	黒い			○	○		○
	濃い陰影			○		○	
	描線の強調			○	○		
	太く大きな	○					
	S型・茂みと分割された						
	切れ切れに描かれた					○	
	くびれた						
	狭められた						
	一本の線で茂みと分割されている						
	錐体の						
	上部で切り取られた						
根元	丸まっている		○				
	濃い陰影			○		○	
	黒い横線の描かれた				○		
	草むらで覆われた						
	閉じられた		○				
根	大きく広がる						
	肥大した・大きい						
	鋭く尖った						○
	数多く見えるように描かれた						
	ゴツゴツした						
	ヒトデの形をした						
	濃い陰影		○	○	○		
地面	ラインの欠如						○
	斜線のひかれた						○
	こんもりとした・丸く小高い						○
	濃い陰影・横線の陰影			○			
付属物	黒々とした殴り描きの鉢			○			
	鉢植えの木		○				
	樹冠部や木の周囲のさまざまな事物	○					
	茂みの中の果実						
	瘤のようなむくみ						
	ギザギザのウロ						
	小川の水						
		5	10	16	11	10	16

Table 2　9つ基準の分散分析の結果

		平均値	標準偏差	標準誤差	F値	p値
樹冠	China	1.567	.827	.076	5.582	.0189 *
	Japan	1.804	.770	.067		
茂み	China	1.400	1.088	.099	11.168	.0010 **
	Japan	1.846	1.029	.090		
枝	China	1.600	.999	.091	2.232	.1365
	Japan	1.791	1.023	.089		
葉	China	.642	.499	.046	.117	.7331
	Japan	.661	.406	.035		
幹	China	1.142	.873	.080	8.111	.0048 **
	Japan	1.446	.825	.072		
根元	China	.650	.644	.059	17.152	<.0001 **
	Japan	.351	.498	.043		
根	China	.108	.312	.028	6.597	.0108 *
	Japan	.227	.411	.036		
地面	China	.808	.725	.066	.092	.7618
	Japan	.785	.474	.041		
付属物	China	.658	.510	.047	84.122	<.0001 **
	Japan	.158	.346	.030		

+ p<0.1　* p<0.05　**p<0.01

の描き方に明らかな日中差（F(1, 250)=84. 122, p<. 01）が見られたのである。その下位基準を詳しく見ると、中国人大学生の方が日本人大学生に比べ、「樹冠部や木の周辺の様々な事物」を多く描かれている結果となった。

3．考察

バウムテストの結果をまとめると、顕著な日中差が見られたのは、「茂み」、「根元」と「付属物」という４つの基準における得点であった。つまり、「茂み」については、日本人大学生の方が中国人大学生に比べ高い結果となり、「根元」と「付属物」については、中国人大学生が日本人大学生に比べ高い結果となった。

①「茂み」

顕著な日中差が見られたのは、「濃い陰影」、「豊かな」、「鬱蒼とした・ボリューム感のある・誇張された」の３つの下位基準の部分であり、日本人大学生の評点は中国人大学生に比べ高い結果が見られた。Figure 1は典型な一例である。Figure 2は中国人大学生の一例として示しておきたい。

先に Table 1として挙げたバウムテストに表れるサインと精神症状の関係を説明している表に従えば、「濃い陰影」は内向、不安と抑うつの指標であり、「豊かな」は外向の指標であり、「鬱蒼とした・ボリューム感のある・誇張された」は外向、不安、神経過敏と抑うつの指標である。つまり、日本人の場合は、中国人に比べて幹や樹冠を黒く塗る傾向が多く見られた。日本人大学生の方が中国人大学生より抑うつ、不安と外向の傾向を持っていることが言える。樹冠や幹などを黒く塗ることはうつ傾向の表現であると、一般的に解釈される。

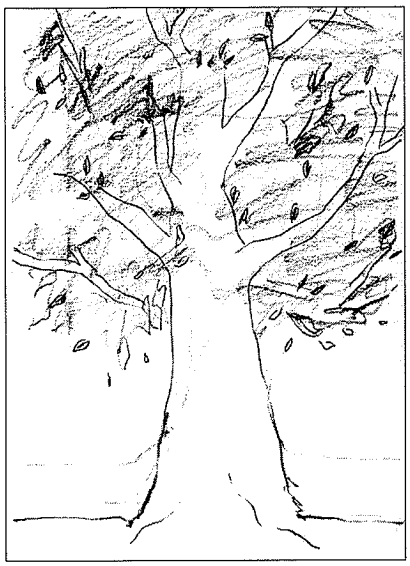


Figure 1：日本人、23歳、男性

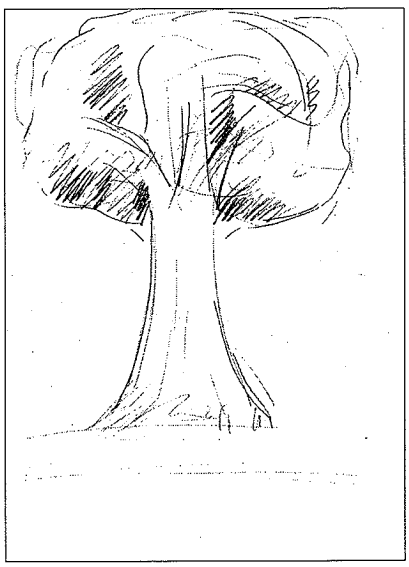


Figure 2：中国人、20歳、女性

②「幹」

有意な日中差が見られたのは、「縞模様の」、「太く大きな」の２つの下位基準の部分であ

り、日本人大学生の評点は中国人大学生より高い結果となった。Figure 3 は典型な一例である。Figure 4 は中国人大学生の一例として示しておきたい。

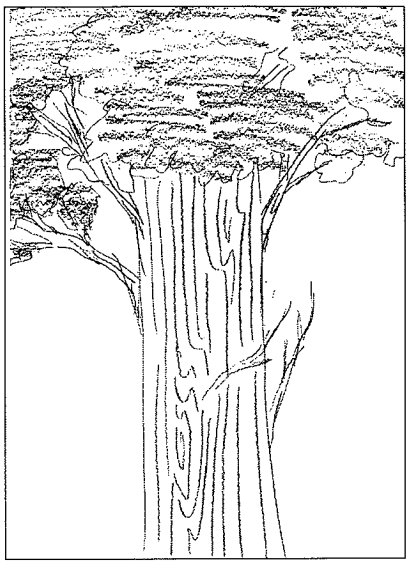


Figure 3：日本人、21 歳、女性

幹は基本的な生命エネルギーが流れていく主要な水路と見なされていると同時に、情緒機能との内的関係を明らかにする部分でもある。Table 1 が示しているように、「縞模様」は不安と攻撃性の指標であるが、一般的には「感受性、敏感性、観察力」と解釈されることが多い。また、太い幹は外向の指標である。つまり、日本人の場合は、中国人に比べて太い幹に縞模様を描く結果が分かった。日本人大学生の方が中国人大学生より外交的で、感受性が高い傾向を持っていることが言える。

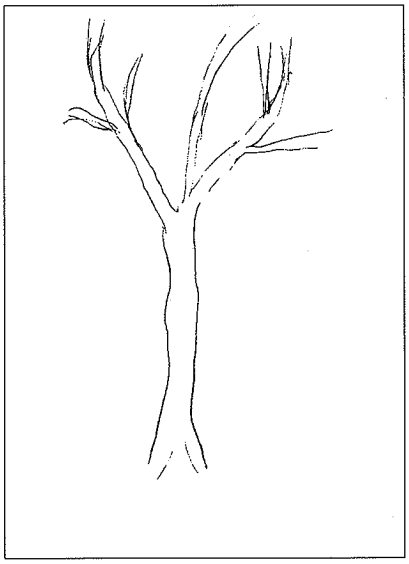


Figure 4：中国人、20歳、男性

③「根元」

明らかな日中差が見られたのは、「濃い陰影」、「閉じられた」の２つの下位基準の部分であり、中国人大学生の評点は日本人大学生に比べ高い結果となった。Figure 5 は典型な一例である。Figure 6 は日本人大学生の一例として示しておきたい。

さらに詳しく見ていくと、中国人大学生は「閉じられた」根元を多く描き、日本人大学生は「鋭く尖った」根っこを多く描いている。根元は幹と根の移行領域である。Blolander（1977）は「不規則に曲がった形は、地面が変化していると信じ、それに伴う不安全感を有している」と指摘している。つまり、Figure 5 のような閉じられた根元はまっすぐなラインではないことから、不安定感を表現していると言えよう。日本人の場合は、本来根っこは見えない部分であるのに、尖った根っこを見せているという傾向が見いだされた。Figure 6 のように茂みで覆い隠すことで防衛していると根っこを無防備に見せてしまうことは、日本人の防衛規制の働き方は多層的であるとも言えよう。

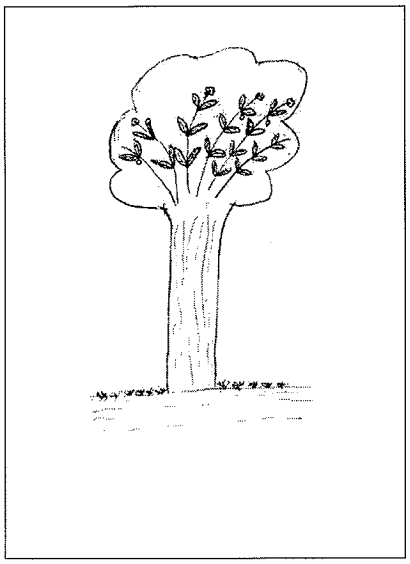


Figure 5：中国人、21 歳、女性

④「付属物」

中国人大学生は日本人大学生より付属物、つまり、「樹冠部や木の周辺の様々な事物」を多く描く傾向がある。Figure 7 は典型な一例である。

本研究で用いたバウムテストの教示は「木を一本描いて下さい」であるが、中国人大学生は木以外の物、つまり背景や様々な付属物を多く描いており、場合によっては風景そのものになっているものもある。しかし、日本人大学生のバウムテストではそのような傾向はほとんど見られなかった。

⑤考察およびまとめ

バウムテストから日本人大学生は「茂み」を表現し、木を黒く塗る傾向が多く見て取れた。また、「幹」では特に「縞模様」「太く大きな」項目において、日本人大学生が中国人大学生より得点値が高かった。同様に日中差が表れた「根元」においては中国人大学生の得点値が高く、「濃い陰影」「閉じられた」根っこを描く傾向があるようだ。そして、「付属物」において中国人大学生は日本人大学生より「樹幹部や木の周辺の様々な事物」による得点が高い。

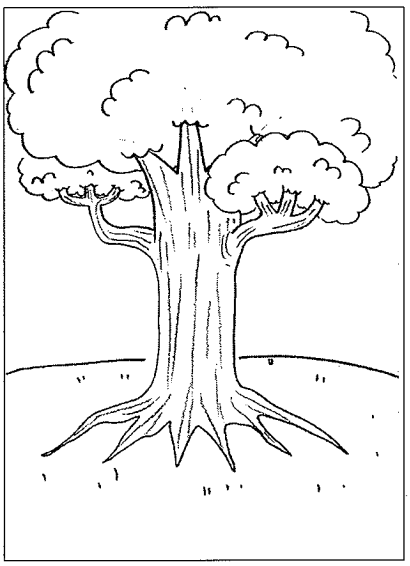


Figure 6：日本人、19歳、女性

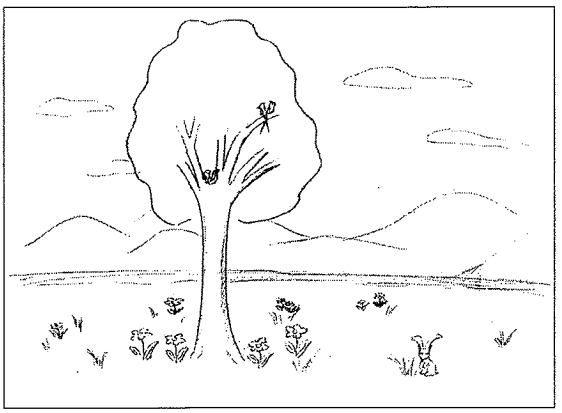


Figure 7：中国人、20歳、女性

なぜバウムテストにおいてこのように顕著な日中差が現れたのであろうか。

前にも触れているが、日本人は「内」と「外」の「枠」に拘り、中国人は血縁を中心として「面子」を重視する。「枠」に代表される日本文化を背景とする人間関係の持ち方は、「外」に向けて「内」を作り、そして「内」の中でさらに「内」を作っていくのである。その「内」となるものは「外」に出る、あるいは表現されることは大変難しく、エネルギーのいることとなる。「内」に「引きこもった」者は簡単に「外」に出られないことから、落ち込んでうつ病、あるいはうつ状態になりやすいことは容易に理解されるであろう。本

調査によって明らかになった日本人が樹冠を黒く塗り、幹に縞模様を描く傾向があるという結果は、Ji（吉、2005）の結論を裏付けるものである。つまり、日本人は感受性が豊かなゆえに、人間関係に関してストレスを感じやすいが、それを「外」に向けて表現することによって上手に消化、解決できない場合には、より「内」にこもって落ち込んでしまう傾向がある。

中国人が重んじている「面子」は他者との相互活動によって直接相手に対して生じるものであり、個人が他者ないし社会に対して示すものである。個人の面子に対する要求はいわゆる一種の自己尊重への要求でもある。面子は相手、つまり他者が存在する限りにおいて、その関係を通じて生じるものである。中国人は人と人の間に深い遠慮を重んずる。自分と相手の「面子」をお互いに守ることは、むしろ一種の暗黙の了解であり、傷つけてはいけないものである。本研究によって明らかになった中国人は根元を閉じられた線で描く傾向がある結果も、この「面子」文化によってもたらされたものではないだろうか。面子と面子でつき合うということは外に見せた通りに見てほしい、また見せたくないものは見ないでほしいと意味する。つまり、閉じられた線で表現された根元を見せるが、その根元の中身、つまり根っこの部分を見せないのである。すなわち、中国人が日本人に比べて不安を自分の中に秘める傾向があり、そのため過剰に秘める努力すると心身症になる傾向を含んでいるのではないかと思われる。

また、中国人の場合は木以外に、背景や様々な付属物が描かれることが多かったが、日本人のバウムテストではそのような傾向はほとんど見られなかった。付属物の加筆は木以外のものに注意を向けようとするものと思われる。つまり、木とは関連のない付属物は不安を隠すための手段としてとられる防衛手段と考えられる。

したがって、本研究の調査結果によって明らかになった日本人と中国人のパーソナリティ特性の差異はこの文化を背景とする人間関係の持ち方の差異と密接に関連していると考えられる。

Ⅲ．結論と今後の課題

本研究はバウムテストを用いて日本人と中国人パーソナリティ特性の差異について比較し、そしてその差異と日中の文化特有の対人関係との関連について考察を試みた。その結果、中国人の場合は木以外に、背景や様々な付属物が描かれることが多かったが、日本人のバウムテストではそのような傾向はほとんど見られなかった。付属物の加筆は木以外のものに注意を向けようとするものと思われる。そして、根元を閉じられた線で描く傾向もその内容、中身、つまり不安を隠すための防衛と思われる。また、日本人は中国人に比べて樹冠を黒く塗り、幹に縞模様を描く傾向が多く見られた。幹に縞模様を描くことは感受性の強さを示すものであり、木を黒く塗ることはうつ傾向の表現であると解釈されているため、これは日本文化に特有な神経症の現れ方と考えられるのであろう。

本研究によって行われたバウムテストの調査結果を統計処理するに当たって、フランス

の臨床心理学者及び筆跡学者D・ドゥ・カスティーラ（Denise de Castilla）が作成した整理票を用いた。Lindzey（1961）が指摘したように、投影法を比較文化研究に用いる際に言語と得点化の客観性が問題として存在する。本研究は、日本語と中国語が堪能な研究者によって調査が行われ、またバウムテストに表れるサインと精神症状の関係に焦点を絞って、３名の臨床心理学者によって客観的に得点化を試みた。今後の課題として、バウムテストの解釈に用いられる指標は、日本、および中国における臨床経験に基づいて開発されたものを使用することが挙げられる。このことは、日本、および中国の臨床心理にかかる大きな課題でもあると言える。

また、マツモト（Matsumoto, 2000）はクロス・カルチュラル（cross-cultural：比較文化）研究とインターカルチュラル（intercultural：異文化）研究の間に重要な相違が存在すると述べている。彼は、クロス・カルチュラル研究とは、たとえばＡとＢの文化と相違を感情表現に基づいて比較するといったように、２つもしくはそれ以上の文化を興味のある変数に基づいて比較するのである。それに対して、インターカルチュラル研究とは、２つの異なる文化にいる人間のコミュニケーションを調査する研究である。従って、今後の課題として、本研究はクロス・カルチュラルの範疇からクロス・カルチュラルまで発展させることによって、より心理臨床的な意義が深まっていくことだろうと考えられる。

<付記>

本論文の作成に当たり、貴重なご指導を頂きました宇部フロンティア大学人間社会学部酒木保教授に深謝いたします。また、データの統計処理に協力してくださった鈴木貴子様と和田崇利君に感謝を申し上げます。

なお、本論文は、「文化と行為Ⅱ」というタイトルで第 12 回多文化間精神医学会、６月 10-11 日、福岡（2005 年）で学会発表を行いました。また、「こころと文化　多文化間精神医学研究」、5(1), 52-61(2006)に掲載されました。

文献

青木健次：空間象徴の基礎的研究―Grunwald の図式の横軸と用紙空間の内的構造―
Japanese Bulletin of Arts Therapy, 12: 7-13(1981).

Blolander K.（高橋依子訳）：樹木画によるパーソナリティの理解．ナカニシヤ出版，京都（1999）.

Buck, J. N. : The H-T-P technique: A qualitative and quantitative scoring manual. J.Clin.Psychol. 4, (1948).

De Castilla, Denise（安部恵一郎訳）：バウムテスト活用マニュアル―精神症状と問題行動評価―．金剛出版，東京（2002）.

土居健郎：表と裏．弘文堂，東京（1985）.

土居健郎：日常語の精神医学．医学書院，東京（1994）.

Holtzman, W. H. : Chapter 6:Projective Techniques, Triandis, H. C. & Berry, J. W. Handbook of Cross-Cultural Psychology, Vol.2: Methodology, Allyn And Bacon, Inc, (1979).

井上孝代：心理学と多文化間精神医学の協働．文化とこころ，1(1)：16-24（2002）.

吉　沅洪：中国人の家族と血縁―儒教の精神を中心とする人間関係についての歴史的概観．臨床心理研究，京都文教大学心理臨床センター紀要創刊号，117-121（1999）.

吉　沅洪・酒木　保：日中のことばから捉えた文化と神経症．人間・文化・心，京都文教大学人間学部研究報告第２集，69-81（1999）.

吉　沅洪：ロールシャッハの W 反応から見た在日中国人の把握様式．文化とこころ，5，137-145（2001）.

Ji, Y.(吉　沅洪): Appearance Pattern of Psychoneurosis Symptoms and Cultures. 2005 APA Convention, Washington, DC, August 18-21 2005, (2005).

Koch,C.（林　勝造，国吉政一，一谷　彊訳）：バウム・テスト―樹木画による人格診断法―．日本文化科学社，東京（1970）.

Lindzey, G. : Projective Technique and Cross-cultural Research. New York: Appleton-Century-Crofts, (1961).

Linton, R. : Foreword to the Psychological Frontiers of Society. by A. Kardiner. New York: Columbia University Press, (1945).

Matsumoto, D.（南雅彦・佐藤公代監訳）：文化と心理学―比較心理学入門―．北大路書房，東京（2001）.

宮崎忠男・藤井純子・小林　淳：精神分裂病者のバウムテストの因子分析―３因子抽出の場合―．心理臨床学研究，5(1)，44-50（1987）.

Segall, M. H., Dasen, P. R., Berry, J. W. & Poortinga, Y. H.（田中国夫・谷川賀苗訳）：比較心理学．北大路書房（1995）.

酒木　保：内閉神経症者の存在構造とその治療．心理臨床学研究，14(2)，121-132（1996）.

酒木　保：「内」と「外」、「裏」と「表」、「本音」と「建前」にみる人間関係．臨床心理研究，京都文教大学心理臨床センター紀要，5，25-31（2003）.

Tseng, Wen-Shing : Transcultural Psychiatry. Academic Press, (2003).

鈴木一代：異文化遭遇の心理学―文化・社会の中の人間―．ブレーン出版，東京（1997）.

上原麻子：留学生の異文化適応言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究．広島大学教育学部紀要，111-124（1988）.

Drawing features, personality characteristics, and cultures

-A comparative study between Japanese and Chinese college students based on the Tree Test-

Abstract:

In the present research, we compare the differences in drawing features and personality characteristics between Japanese and Chinese, and intend to investigate their connections to interpersonal relationship characterized by its own culture. There are 252 participants, among which 120 are Chinese college students and 132 are Japanese college students. As a result, many Chinese students drew the background and various supplemental things besides the tree. This fact implies Chinese are likely attracted to something other than the tree. The tendency of using a line to draw the bottom of the tree is related to the self-defense of hiding his/her inside and upset. This result is considered to be related to "Mianzi(面子)" in Chinese culture. On the other hand, many Japanese tend to paint the tree crown black, and to draw the trunk with stripes. It can be interpreted that drawing the trunk with stripes is linked to his/her sensitivity, while painting the tree black is a representation of depression. This result is related to "Waku(枠)" in Japanese culture.

Keyword: personality characteristics, drawing features, culture, Tree Test, Japanese and Chinese college students

研究 3

文化と行為

—「引きこもり」に関する日本文化論的考察—

要約

日本において社会問題となっている「引きこもり」について日本文化論から考察した。日本文化ではとりわけ枠が重要視されており、この枠は個人が所属する家庭、学校、会社などである。この枠の中での対人関係が日本文化独自の問題を醸成する。ここでは、枠内構造についての考察をし、さらに枠からの出入り口としての裏口と表口の機能、本音と建前について論究した。そしてこれらが十分に機能しないことから、「引きこもり」が発生すると結論した。また、枠の階層性について説明し、力動のベクトルを外に向けることが、引きこもりの治療であると事例を通して説明した。

キーワード：引きこもり、日本文化論、枠、枠の階層性、力動のベクトル

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　日本文化に見る枠
Ⅲ　「枠の中」である「うち」について
Ⅳ　枠からの出入り口としての「表口」と「裏口」
Ⅴ　「本音」と「建前」
Ⅵ　建築文化がもたらせた「引きこもり」
Ⅶ　事例
Ⅷ　「内」の出現による「外」の醸成とその階層性
　　—「引きこもり」の出現—
Ⅸ　おわりに
文献

Ⅰ　はじめに

現在「引きこもり」は増加している。しかし、その治療法に真新しいものがなく、「引きこもり」の原因すらも明確になっていない。「引きこもり」の増加と高齢化は、社会問題に

なっている。実際、生活に大きな変化が見られることなく、家の中のごく狭い空間範囲から出ることが出来ないでいる者は、少年から中年にまで及んでおり、中には35歳を過ぎた者もいる。このような「引きこもり」という事態は、日本文化特有の対人関係から発生したものと考えられる。かつて我々は日本文化と中国文化における言葉と行為から、不適応によって出現する症状について考察した（吉・酒木、1999）。

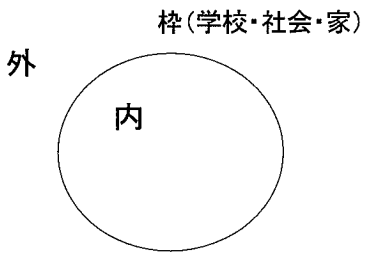
つまり、対人関係の持ち方は，歴史が育んだ文化の影響を大きく受けているとの考えからである。例えば、日本文化では自分がその都度所属している集団を重要視する。つまり、日本人は家や所属集団（会社等）を中心とした人間関係によって作られる枠に縛られている。このように歴史を背景として構築された文化が，民族特有の対人関係の有り様を創り上げ，その文化に適応できない場合に、文化特有の不適応状態を醸成することが考えられる。つまり人格の発達には文化を背景とした対人関係の有り様が大きな要因となるゆえ、我々はそこでの文化から隔絶した生き方は困難である。ここでは、「引きこもり」を醸成する日本文化の特性について述べていく。

Ⅱ　日本文化に見る枠

日本文化は、とりわけ枠が重要とする。例えば、日本人は他者に自己紹介するとき、自分や自分の持つ資格よりも自分の所属する集団を優先する。自分を他者に位置づけるのに、「場（集団）」つまり、自分が所属している「枠」が社会的集団構成、集団認識に大きな役割を持っており、個人の持つ資格は第二の問題とされるのである。

また、日常においても自分の所属集団を「うちの会社」、「うちの学校」などと呼ぶ。つまり、自分の属する職場、会社、学校などを「うち」つまり「私」と表現する。それに対して、相手のそれを「おたく」、「よそ」＝「外」つまり「他者」と表現する。これは、日常的にしばしば使い分けられている。

次に枠の中である「内」について考えてみたい。



図－1 枠社会としての日本文化

Ⅲ　「枠の中」である「うち」について

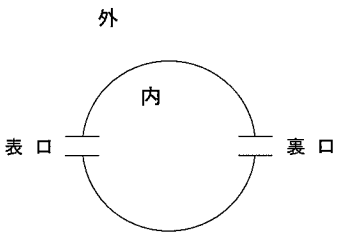
ここで問題となるのは、「内の世界」で対人関係を構成していかなければならない点である。それゆえ、「外」から「内」をのぞき見ることは非常に難しく、逆に「内」から「外」へ出ることに対しても「内」の中での反応を意識しなければならない。この「内の世界の対人関係」が日本文化を背景とした対人関係の構造である。つまり、「内の世界」として強い線を引いて強固な枠を作り、しかもその中でうまくやっていくためにまわりの動静を伺うので、自己主張することが難しい。

枠の中では、もたれあいの競争となり、弱者にとっては一見都合良く思えるが、実はこれが非常に厳しい状況を作り上げるのである。日本文化は基本的にはもたれあいの社会であって、もたれあいであるからこそ人々は互いに他者の動静をうかがい、等しく働くことになる。日本の社会において、それぞれの職場で激しく競争すると言っても、つまるところもたれあいの群れの中で小差の競争である。しかし、その裏での見えない競争は熾烈となる。そこに、様々な問題の発生の要素がある。

結局、「同じように」ということが、裏は別として表向きは非常に無難な方法である。このように、「内の中」でしのぎを削る対人関係が意識されている。そして相手の動静をうかがうことから生まれてきたのが「裏」と「表」ではないかと考えられる。

Ⅳ　枠からの出入り口としての「表口」と「裏口」

それらは「表口」と「裏口」である。この出入り口の機能について述べてみよう。我々が通常「裏」とか「表」とかを使うときは対になって扱うことが多い。例えば、表通りがあれば裏通りがあり、表道に裏道、表向きに裏向き、表地に裏地、表街道に裏街道のように「表」があれば「裏」がある。

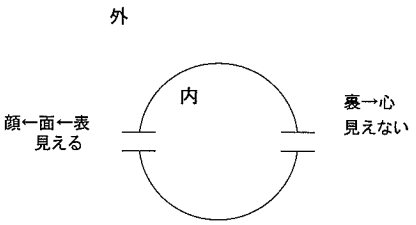


図－2　出入り口としての表裏

単独で「表」または「裏」を使う場合には、必ずその反対を連想させる。「表を繕う」は、裏が破れているかもしれないし、「裏をかく」は相手の表を考えて裏から行くといったように、多層的な要素を含んでいる。

つまり「表」は物事の外側、上部の現れた部分、相反する面を持った物事を目立つ方向から見て目に付く部分と解され、見えること、わかることに繋がる。つまり、「表口」とは外に出して見られてもよいものの出入り口である。そして、不都合なものは枠の中の奥深くにしまい込んでしまうのである。さらに奥に入っていくと、「裏口」にたどり着く。「裏口」とは不都合な物、見せたくないものの出入り口である。

さて、「裏」と「表」についてもう少し、言葉の視点から考える。かつて吉・酒木（1999.）は日中の言葉から捉えた、文化と神経症について考察した。そこでは、「表」は顔であり「裏」は心であることを説明した。「顔で笑って心で泣いて」は、表向きは平然としていながら裏では泣いているような状態や、「いつも笑っている仮面をつけているけど、内心では怒っている。」という一つの表情を相手に対して上手に使い分けて対応しているのが日本人の対人関係の特徴と考えられる。



図－3 見える顔と見えない心

ところで、裏は表に隠れて見えない部分ではあるが、表は表だけを表すものではなく、また裏を隠すためだけのものでもなく、上手に裏を表現することもできるのである。つまり、裏が表を演出しているといっても良いし、また逆もあり得る。

我々が人と対応するときには表を通して裏を一生懸命探ろうとすることがある。表に出された言葉から裏を探るのである。非常に多層的に言葉が取り交わされているのである。この、表から裏を読ませる技術は、日本人独特のものであって、他の文化では類を見ないコミュニケーションの手段であると思われる。

相手に表から裏を読ませるため、相手を言葉では肯定していながらイントネーションや微妙なニュアンスによって否定していることを読みとらせる。このようなことは英語ではできない。日本語による日本文化の対人関係のきめ細やかさとも言えるが、むしろ対人関係を上手に保っていくための技法の一つであり、日本文化を背景として出現してきたコミュニケーションの技術であるといってもよい。巧みな非言語的コミュニケーションが日本語では特に発達している。

しかし、断言を避ける傾向は、結局のところはその時々の状況に応じて、いつの間にか裏が表になったり、表が裏になったりしているのであり、つまるところ裏も表も互いにつ

ながりを持ちながら、実は同じフィールドにある。メビウスの帯のような構造を持った対人関係なのである。

V　「本音」と「建前」

このような状況から生まれてきたのが、「本音」と「建前」とである。この本音と建て前の使い分けは悪いことのようにいわれているが、これを上手に使い分けることが日本文化における対人関係の基本である。

すなわちこの両者を対人関係の場においてうまく使い分けて、対人的な感情の軋轢が生じないようにしてきたのが「内」の世界を構成したのであろう。つまり、日本の社会に広がる価値の二重構造は、基本的には建前と本音との使い分けであり、それはいわば両者を含んだ全体としての文化体系である。

建前とは社会的規範や、物事の道理で外に向けた理屈であって、これは自分を防御するものであり、鎧兜である。これに対して、本音とは鎧甲を脱いだ「裸の自分」である。建前は、社会的規範などに裏付けられているので、建前しか言わないことが批判されても、建前そのものは批判される要素を含んではいない。

しかし、本音とは、その個人の真意である。それ故、本音はなかなか吐くことはできない。つまり、本音はいろいろな面で外側から見られた自分の評価にかかわってくるからである。従って、本音はなかなか吐けないものであり、また、簡単に吐いてはならないのである。つまり本音は批判の対象になり得る可能性が非常に高いのである。

日本人の対人関係の拗れは、この本音と建前の関係において生じてくることが多くある。例えば職場での対人関係の不信は、このバランスが崩れたときに生じてくる場合が多いと思われる。

つまり、本音は規範から外れたことが内包されており、規範に照合すると矛盾する。この矛盾を矛盾として指摘するのではなく、なぜこのような矛盾した考えをこの人は持つのであろうか、と考えることが、カウンセリングの基本的な原理である。

本音とは、対個人的な対応関係であると受け止め、制度の上に載せるべきものではない。本音を聞くことは、同時に相手の責任を背負うことになるのだと認識しておかなければ対人関係上のさまざまな問題が発生してくるであろう。大切なことは、対人関係の上で、また、内と外の世界で本音と建前を上手に使い分ける必要があるということである。

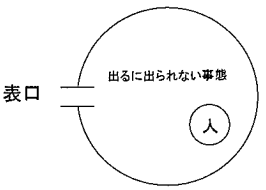
しかし、現在日本では本音と建て前の使い分けが、困難になっている。

その理由の一つには、外国の文化が入り込み、それらが十分にこなされていないままに横行していることであろう。例えば、契約によって物事を決めていく仕組みでは、なかなか本音が出しにくいのが実状ではないだろうか。つまり、契約社会の文化を取り入れはしたものの、非常に未熟なままに契約社会の構造を作りつつある。つまり、本音の出しにくい社会構造ができあがってしまったのであろう。それ故に、本音を受け止める耐性能力が全体に随分低下してきたようである。

それ故に、子供の些細ないたずらに対しても、大人は寛大さに欠け、すぐに警察沙汰にしてしまう。大人のゆとりの無さが見て取れる。裏の喪失は相手の見せたくないものを見てしまったとき、見て見ぬ振りが出来なくなったことを表している。見て見ぬ振りが出来なくなったとき、かつては援助的に関わったのであったが、現在ではその問題を暴露して、その相手よりも優位に立とうとする心性が働く。つまり、すぐに表沙汰にするのである。あるいは、完全に隠蔽しようとするのである。これらは対人関係の裏機能の喪失が如実に表れている。従って、本音の出しにくい社会構造になっており、内へ内へと入っては閉じていく。同時に、本音を受け止めるだけの器量を持つ大人が少なくなっている。このことは、社会が本音を受け止めるだけの、充分な耐性能力が低下していることに連携する。なぜ、裏の機能が低下したのであろうか。最近の家屋の構造から考察したい。

Ⅵ　建築文化がもたらせた「引きこもり」　―裏口のなくなった家屋の問題―

さらに、本音が話せなくなった理由に家屋の問題が在るように思われる。かつての日本の家屋には、如何に小さな家であっても必ず、表口と裏口があった。しかし、最近の集合住宅では裏口をつくることができない。かつては、都合の悪い事態に遭遇すると家の奥深くに入り込み、見えない出入り口である裏口から、こっそりと覗いて、外の情勢を伺い、再び外に出る間合いを見越したものである。つまり、裏口の重要性は外から内を見られないで、外を見ることが出きる機能を持っていることである。たとえ見られることがあっても、見ている人は事情を察して見て見ぬ振りをしてくれたであろう。しかし見せるための出入り口から出てくるのを見たならば、見て見ぬ振りができなくなり、見た人は実状を暴くことになる。裏口を失った文化は、見て暴く事へと変わるのである。隠し事のできない文化は、腹に治めて容認する日本人の人格に変容が生じてくるのである。つまり、個人の力量によって物事を処理する力が軽減する。しかし、外の情勢を伺う裏口を失ったならば、家の奥深くに自分の身をひたすら留めおき、悶々とし生活を送ることになる。つまり、極めて狭い生活空間に留まるのである。さらに、コンピューターが留まることに拍車をかける。仮想世界において自分を生かそうとする。本来外において実現されるべき事なのに内で実現しようとするのである。見た目の便利さや、使い勝手の良さに拘った現在の建築様式が生活文化を大きく変えたのである。例え一戸建ての家であっても、密集した地域での家屋では、裏口を設けていても、本来の裏の機能は果たさない。



図－4　裏口がなくなった家屋が引きこもりを作る可能性

ではなぜこのような「引きこもり」が生じたのであろうか。実際の臨床経験から幼児期の周りからの叱責が強い挫折体験となり、罪悪感が植え付けられた場合がある。例えば、中学校の低学年でいじめに遭い、登校拒否を起こした子どもが、筆者との面接の中で、「義務教育の義務を果たしていないので自分は大変な犯罪者である」との意識をもち、慢性的な鬱状態が数年にわたって、持続し人目に自分をさらすことを避けるために、「引きこもり」を続けたと訴えた子どもがいた。裏口を失った悲劇であろう。

以上、家屋の裏口の機能を人間関係のあり方と結びつけて論証してみた。裏口の無くなった現在社会は、隠すことが出来ない事態を生み出し、以前は腹に収めていたものも、腹におさめきれない事態が生まれてきた。つまり、裏口の喪失は、腹におさめきれない小さな腹の大人を生み出すことになる。従って、自分のすべてをあからさまに晒すことが要求されることが生じてきた。これまで、腹を読みあうことで、うまく納められてきたものが、納められなくなってしまったのである。弱者にとってはそれだけ厳しい社会の風に晒されることになる。その事態に耐えきれなくなったときに、反社会的行動をしたり、うつ的になり「引きこもり」になるものと考えられる。引きこもりの多くは、幼児期の挫折体験が伴っておりディスティミア親和型（樽味伸,2005）のうつ病として出現したのではないだろうか。

さらに、事例をとおして「内」の醸成による「外」の多層性について述べる。

Ⅶ　事例

【クライエント】A君、高校1年生。2学期より不登校になり、筆者はスクールカウンセラーとして、A君の母親と面接を行っていた。

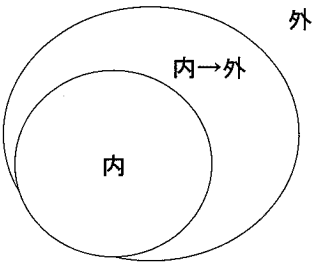
ある普通科進学高校に通うA君は、中学校では良い成績を納めていた。しかし進学先の高校では、授業についていくことがだんだんと難しくなり、高校1年時の1学期期末テストでは芳しい成績を得ることができなかった。これまでA君のことを自慢の息子と思い、過剰な期待をかけてきた両親は、その現実に直面することができなかった。母親は、保護

者会の場で、担任の目の前でA君をひどく叱った。帰宅するやいなや、さらに父親の叱責が待っていた。このことをきっかけに、A君はついに勉強することを放棄し、学校にも塾にも行かなくなり、自宅で毎日ゲームに明け暮れる「引きこもり」の生活を選んだ。いままで「表」で頑張ってきたA君が、初めて両親の敷いたレールに乗った生活を拒否し、不登校という行為によって自己主張を試みた。A君の行為に対して、母親は「まさかここまでやるような勇気があると思っていなかった。」と本音をもらした。A君は引きこもりによって自分の「裏」の生活を築こうとしていた。このようなA君の言動に戸惑い、両親はゲームの時間を制限しようと考えていた。しかしスクールカウンセラーの助言を聞きてからは、母親はA君のそばでゲームの話をしたり、コミュニケーションを取ろうとしたりとA君のために時間をとろうと必死になって努力した。このような母親の姿に彼も反応を見せはじめ、母親をゲームに誘うなど、学校のことに触れないような日常会話なら応じるようになった。また、いままで育児は母親任せで、自分の趣味を優先させていた父親も，A君の不登校と引きこもりをきっかけに母親と話し合うようになった。そして、自分の趣味である釣りにA君を誘うようになった。これまでどんなに困ったことがあっても父親に助けを求めなかったA君だったが、自分のプリンタが壊れた時には父親に修理を頼むようになった。それを見た母親は「不安が減った。いまはこのままでよかった。」とスクールカウンセラーに心境を語り、A君の意見を尊重し、高校を「休学」することに同意した。休学中は、家族と一緒に映画を見に行くなど、A君は少しずつ外に出られるようになった。さて、この事例を考察する。

Ⅷ　「内」の出現による「外」の醸成とその階層性　―「引きこもり」の出現―

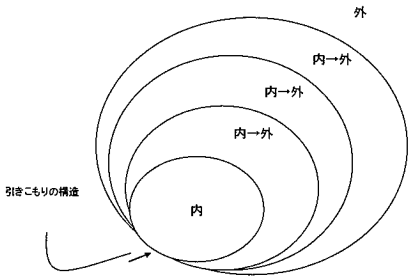
この事例を考察するに当たって、「内」と「外」の階層性について説明しておく。それは自分の所属意識によって「内」が「外」になったり、「外」が「内」になったりするのである。これを見ていくと、「内」の中に又いろいろな「内」が出てくる。「内」が作られると、当然これまで「内」だったものが「外」になる。つまり、「内」と「外」は、常に連動しながら繋がっているのである。

線引きによって、新たに「内」が生まれて「内」が生まれると必然的に「内」だったものが「外」になるのである。



図－5 内の中に内が出来それまでの内が外になる構造

思春期の「引きこもり」は「内の中」に「内」を作り続けた結果であろう。「内」が出来れば、これまでの「内」が「外」になっていくのである。つまり、「外」の階層化が発生するのである。



図－6 内の中に内が出来ることによる外の階層性

A君の場合、まず家の中に入り家族との交流はあったのである。次に、父親との軋轢から、父親を外した内を作ったのである。そして、さらに母親を外した内をつくり、やがてその中に「引きこもった」のであろう。つまり、家族内での力動が内に向かっていったものと思われる。そこで、治療は力動のベクトルを外に向ければよいであろう。つまり、出口を外に向かって開いていけば自ずとこれまでの枠は消えていき、枠の中の外は内へと戻るのである。そのために、徐々に家族との交流を復活して、「内」へのA君のベクトルを「外」に向けることが重要となるのである。父親との交流を持つことが叶ったA君は漸く、内のから外へとベクトルが変換したのである。

内にいても内の中で不都合が生じた場合には、外の階層性が意識されずに生まれてくることになる。先の家屋の構造変化から、外を見ることすら出来なくなる事態は、より強固な内を内の中に作り続けるのである。我々はこのような事態を「引きこもり」とよんでい

る。

IX　おわりに

「うち」と「そと」,「裏」と「表」,「本音」と「建前」の語を用いて，対人関係の構造について説明をこころみた。本音と建前を上手に使い分けることが、日本文化への適応条件であると考えられた。しかし、この使い分けが随分困難になってきているように思われる。外来文化の未消化な蔓延化と家屋の構造の変化が、伝統的な日本文化に危機をもたらせているように思われる。それ故に適応障害の多因子がもたらす人間への影響がうつ病をともなう「引きこもり」を多発させていると考えられる。しかも彼らのうつ病の症状は日本文化をしっかりと背負ったものである。社会構造とうつ病については、樽味伸・神庭重信（2005）が詳しく考察している。

＜付記＞

本論文は、「文化と行為Ⅰ」というタイトルで第 12 回多文化間精神医学会、6 月 10-11 日、福岡（2005 年）で学会発表を行いました。現在「こころと文化　多文化間精神医学研究」に投稿中です。

文献

土居健郎　1985　表と裏　弘文堂

吉　沅洪・酒木保　1999　日中のことばから捉えた文化と神経症　人間・文化・心　京都文教大学　人間学部研究報告 第二集 69-81.

増原良彦　1984　タテマエとホンネ　講談社　現代新書

酒木　保　1996　内閉神経症者の存在構造とその治療　―主に芸術療法的接近を試みて―　心理臨床学研究,14(2), 121-132.

酒木　保　1997　「わたし」がみえなくなる 今川民雄編著 「わたし」をみる・「わたし」をつくる　129―150.川島書房

塩路理恵子・中村　敬・牛島定信　2002　ひきこもりの脱却過程で四国遍路の旅に出た一例　―森田療法退院後の経験―　こころと文化　第 1 巻第 2 号、189-195.

樽味　伸　2005　現在社会が生む「ディスチミア親和型」臨床精神医学 34(5)、687-694.

樽味　伸・神庭重信　2005　うつ病の社会文化的試論　―特に「ディスチミア型うつ病」について　日本社会精神医学会誌　第 13 巻 3 号 129-136.

Culture and Behavior

-A Study of Social Withdrawal in View of Japanese Culture

Abstract:

From the point view of Japanese culture, we investigated the social withdrawal (Hikikomori), which has become a problem of Japanese society. "Waku" is particularly important in Japanese culture, which means family, school and company to which each individual belongs. The interpersonal relationship inside Waku forms Japanese culture's own unique problems. We discussed the structure inside Waku, the function of Uraguchi and Omoteguchi serving as an exit and an entrance of Waku, as well as Honne and Tatemae. As a result, social withdraw occurs if above issues are not sufficiently functioning. In addition, through a case study, we describe the hierarchy of Waku, and the treatment of the social withdrawal by having the force vector pointing outward.

Keyword: social withdrawal, Japanese culture, Waku, hierarchy of Waku, force vector

資料

5名中国人大学の事例研究

中国人大学生５名（男２名、女３名）を対象にインタビュー調査を行った結果をまとめて資料として載せておきたい。調査の際には、ＣＭＩ→ＳＤＳ→Tree Test(Pre)→ロールシャッハテスト→Tree Test（Post）というテストバッテリーを用いた。その調査結果に関する総合的な所見も示しておく。詳しい事例検討については、今後の課題として残したい。

１．Ａさん、女性、21歳

Table 1 Ａさんのロールシャッハテストの分類表

Card	R1T(sec)	RT(sec)	R No.	Pos.	L-Main	L-Add.	D-Main	D-Add.	C-Main	C-Add.	P/O	Form
Ⅰ	8	94	1	1	W		FM	FC'	A		P	2
			2	1	W	S	FM		Mask			2
			3	1	W		FC		A		P	3
			4	1	W	S	M	FK	H	cloth		2
			5	1	W		F		Map			3
			6	1	W		F		At			3
Ⅱ	10	104	1	1	W		F		A			3
			2	1	W		CF		food			3
			3	1	W		FC		cloth			3
			4	1	W		M	F	H			3
			5	1	W		CF		Hd	bl		3
			6	1	W		M	FC'	H		P	2
Ⅲ	10	65	1	1	W		M	CF	H		P	2
			2	1	W		M	CF	H		P	2
			3	1	W	S	F		Aobj			3
Ⅳ	9	116	1	1	W		FM	FC	A			3
			2	1	W		M	FK	H			2
			3	1	D		FM	FK	A			2
			4	1	W		Fc		Aobj			2
Ⅴ	11	84	1	1	W		FM	FC'	A		P	2
			2	1	W		M	FK	Hd			3
			3	1	W		FM	CF,FK	A	Pl		3
Ⅵ	10	97	1	1	W		FM	FC,FK	A			2
			2	1	W		CF		Aobj			3
			3	1	W	S	FK	FC	Lds			3
			4	1	W		F		A			3
Ⅶ	9	79	1	1	D		FM		A			2
			2	1	D		F		Mask			3
			3	1	D		Fc		Food			2
			4	1	W	S	F		Obj			2
Ⅷ	12	96	1	1	W		CF		A	bl		3
			2	1	D		FM		A			2
			3	1	W		CF		Food			3
			4	1	W		FK		At			3
Ⅸ	9	89	1	1	D		M	FC,FK	H	cloth		3
			2	1	D		CF	mF	Fire			3
			3	1	W		F		Obj			3
			4	1	W	S	M	FC,FK	H			2
Ⅹ	9	84	1	1	W		FC	Csym	Lds	(H)		3
			2	1	W		M	CF	Lds			3
			3	1	W		FM	FK	A			3
			4	1	W		CF		At			3

Table 2　Aさんの Summary Scoring Table

R	42	W:D		34:7	M:FM	10:10
Rej(Rej/Fail)	0(0/0)	W%		82.9%	F%/ΣF%	19.5%/82.9%
TT	15'8"	Dd%		0%	F+%/ΣF+%	12.5%/47.1%
RT(Av.)	90.8"	S%		0%	R+%	39%
R1T(Av.)	9.7"	W:M		34:10	H%	23.8%
R1T(Av.N.C)	9.4"	E.B.	M: ΣC	10:10.75	A%	31%
R1T(Av.C.C)	10"	E.B.	FM+m:Fc+c+C'	10.5:3.5	At%	0%
Most Delated Card & Time	Ⅷ, 12"	E.B.	Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ/R	29.3%	P(%)	6(14.6%)
Most Disliked Card	Ⅱ	FC:CF+C		3:9	CR	11
Most Liked Card	Ⅹ	FC+CF+C:Fc+c+C'		12:3.5	DR	7
Σh/Σh(wt)		W-%		0	修正BRS	12
		Δ%				
		RSS				

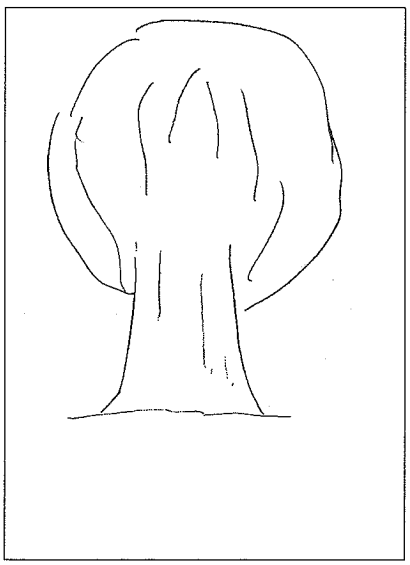


Figure 1　Aさんのバウムテスト (Pre)

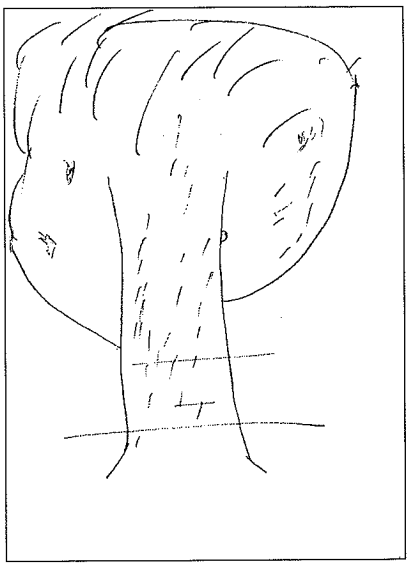


Figure 2　Aさんのバウムテスト（Post）

総合的所見

CMI の領域はⅡであり、健康的である可能性が高いと判断される。自覚症プロフィールでは、全体を通して特に高い値は見られないが、身体的自覚症状の“目と耳”“心臓脈管系”“習慣”、精神的自覚症の“過敏”が、比較的突出している。特定の器質的問題（近眼など）がないのであれば、若干の疲労状態にあるのかもしれない。

SDS の値は 28 であり抑うつ傾向としては、平常者の範疇でも低いほうである。

ロールシャッハテストの総反応数は、42 であり知的生産性の高さや検査に対する取り組みが積極的であったことがうかがえる。純粋形態反応と一次形態反応では、一次形態反応の形態水準の方が高い傾向にある。このことは、形態に他の要素をうまく統合してゆくことのできる能力を示している。各図版における初発反応時間は 8 秒から 12 秒の間で、課題の変化にも安定して取り組めたようである。反応領域は全体反応が 8 割以上を占め、課題をより全体的、抽象的に統括してこなそうとした傾向を示している。しかし、全体としての形態水準はやや低めであり、反応数の多さもあわせて考えると、若干高すぎる要求水準がこの被験者にあるように考えられる。体験型では、内的な刺激と外部の刺激に対してほぼ同程度に反応しているものの、より原始的な運動反応と外部刺激への反応の比では前者の値が高く示されている。したがって、理性的な判断能力を持つ一方で、時として大胆な行動に出たり、衝動的に行動に出たりする傾向が推測される。

ロールシャッハテストの前後で行われたバウムテストでは、大きな変化は見られないが、後のもののほうが、より大雑把な印象を受ける。大きさ、描線はしっかりとしており積極性や安定性を示すと考えられる。一方、内部には雑に描かれた線が表現されている。この

ことは、過敏性もしくは神経質な傾向を併せ持つことを示すと考えられる。また、開いた幹が樹冠部分に直結しており衝動性を内在させていることが伺える。特にロールシャッハテスト施行後の大雑把さ、幹と樹冠のバランスの悪さが見られることから、ここに示されたような衝動性は、難課題やエネルギーが高く要求される場面で出現しやすい傾向であると推測される。

今回の諸テストを総合すると、現在、健康的な精神状態にあることが推測される。活動への積極性が高く、さまざまな事象に安定して関わることのできる能力を有していると思われる。また、環境から多くの情報を取り入れていこうどする欲求もうかがえる。しかし、時に、そのようなエネルギーの高さは行動に直結する傾向もあるようである。そのため、人に乱雑であるとか大雑把であるといった印象を与えることがあるかもしれない。

2．Ｂさん、男性、22 歳

Table 3　Ｂさんのロールシャッハテストの分類表

Card	R1T(sec)	RT(sec)	R No.	Pos.	L-Main	L-Add.	D-Main	D-Add.	C-Main	C-Add.	P/O	Form
Ⅰ	8	23	1	1	D		M		H			2
Ⅱ	29	67	1	1	D		M		(H)			3
Ⅲ	12	40	1	1	D		M		H		P	2
Ⅳ	92	138	1	1	W		FC'		Pl			3
Ⅴ	12	54	1	1	W		FM		(A)		P	2
Ⅵ	12	36	1	1	W		F		Aobj		P	2
Ⅶ	12	105	1	1	D		F		Ad			2
			2	1	D		F		(Hd)			3
			3	1	D		FM		A			2
Ⅷ	10	89	1	1	D		FM		A		P	3
			2	1	Wc		FK		At			3
Ⅸ	25	134	1	1	D		F		Obj			3
			2	1	D		M		(H)			3
			3	1	D		CF		Obj			3
Ⅹ	19	84	1	1	D		M		(H)			3
			2	1	D		M	FC	(A)			3
			3	1	D		FM	FC	A			2

Table 4　Bさんの Summary Scoring Table

R	17	W:D		4:13	M:FM	6:4
Rej(Rej/Fail)	0(0/0)	W%		23.5%	F%/ΣF%	23.5%/94.1%
TT	12'50"	Dd%		0%	F+%/ΣF+%	50%/43.8%
RT(Av.)	77"	S%		0%	R+%	41.2%
R1T(Av.)	23.1"	W:M		4:6	H%	35.3%
R1T(Av.N.C)	27.2"	E.B.	M:ΣC	6:1.5	A%	35.3%
R1T(Av.C.C)	19"		FM+m:Fc+c+C'	4:1	At%	0%
Most Delated Card & Time	Ⅳ, 92"		Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ/R	47.1%	P(%)	4(23.5%)
Most Disliked Card	Ⅴ	FC:CF+C		1:1	CR	6
Most Liked Card	Ⅹ	FC+CF+C:Fc+c+C'		2:1	DR	6
Σh/Σh(wt)		W-%		0	修正BRS	−5
		Δ%				
		RSS				

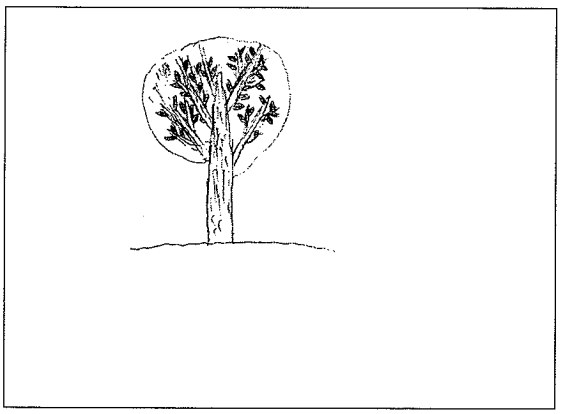


Figure 3　Bさんのバウムテスト (Pre)

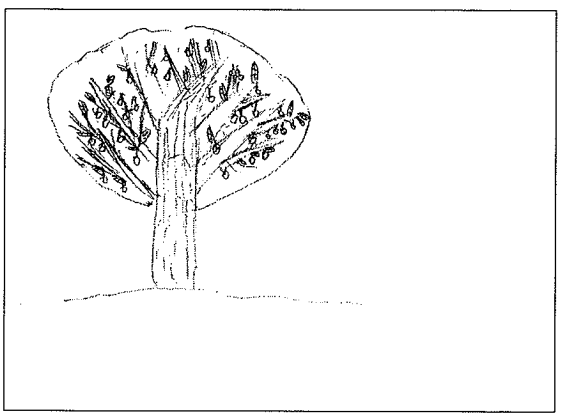


Figure 4　Bさんのバウムテスト (Post)

総合的所見

CMI の領域はⅡであり、健康的である可能性が高いと判断される。自覚症プロフィールでは、身体的自覚症がほぼ低値であるのに対して、精神的自覚症の“過敏”“緊張”の値がやや高く、この精神的自覚症によって領域がⅡへとおしあげられたかたちをとっている。

SDS の値は 36 であり、平常者の抑うつ傾向の平均的な値を示している。

ロールシャッハテストの総反応数は 17 と一般成人（日本人）としては低い。そのため、統計的指標の信頼性は低い。反応領域や反応内容など特定の反応へのこだわりが示されていないため、反応数の少なさはこの被験者の活動性の低さを反映したものと思われる（受検態度はどうだったか？）。反応領域では、部分反応の割合が高く、分割的、具体的な課題への取り組みを示している。全体的に形態水準はやや低めではあるが、具体的な形態を有する図版や領域に対しては高い水準の反応もなされている。体験型では、内向傾向が強く、外部刺激よりも内的な活動性に従って、行動の指針が決定されやすいことを示している。しかしながら、Ⅷ・Ⅸ・Ⅹでの反応数が全体の 47%を占め、これらの色彩カードでの反応は形態水準が落ちていること、Ⅱでの初発反応時間の遅延などを総合的に考えると、色彩という外部刺激が加わることで、この被験者の反応に一時的な混乱が生じたものと推測される。各カードの初反応時間も８秒から 92 秒と大きな幅があり、課題の性質の変化への戸惑いが示されたのであろう。

バウムテストでは、2 枚とも用紙が横に使用さている。どちらも左領域のみに表現されており、内的な世界への傾倒がうかがえる。描線は弱く、ところどころで線の継ぎ足しも見られる。幹には筋が何本も書き込まれ、樹冠の中の枝にはびっしりと葉や実（2 枚目）が描かれているのが特徴である。これらは過敏性、こだわり傾向、不安を示すと考えられ、この被験者の精神的な繊細さを持つ一方で神経症的な一面を持つことが予想される。

今回の諸検査の結果より、現在の健康的な精神状態であることが想定される。しかし、環境からの刺激に敏感であり、それらを切り離して事象にあたることが難しく、そのことで心理的な負担を感じやすい特徴を有しているものと思われる。よく言えば繊細、悪く言えば神経質といった評価が人からなされることがあるかもしれない。比較的、具体的な方法や決められた法則に従って作業をこなすことは得意であるようだが、漠然とした作業になれることには若干の時間をおくことが必要なようである。課題の性質により得意不得意が現れやすいことも特徴的である。

3．Cさん、女性、21歳

Table 5　Cさんのロールシャッハテストの分類表

Card	R_1T(sec)	RT(sec)	R No.	Pos.	L-Main	L-Add.	D-Main	D-Add.	C-Main	C-Add.	P/O	Form
Ⅰ	11	84	1	1	W		FM		A		P	2
			2	1	W		M	F	Hd			2
			3	1	D		F		A			3
Ⅱ	12	85	1	1	D		F		A			3
			2	1	D		F		A			3
			3	1	D		FC		A			2
Ⅲ	12	79	1	1	Wc	S	F		Ad			2
			2	1	D		M		(H)			3
Ⅳ	25	167	1	1	W		FK		(H)			3
			2	1	di		F		Pl			3
			3	1	W		M		(H)	Obj		3
Ⅴ	9	130	1	1	W		FM		A		P	2
			2	1	W		FM		A			2
Ⅵ	27	138	1	1	D		FC'		A			2
			2	1	W		F		Food			3
Ⅶ	5	118	1	1	W		M		H	Obj		2
			2	1	D		FM		A			2
			3	1	D		F		Hd			2
Ⅷ	10	121	1	1	D	S	FC		Obj			2
			2	1	D		M		H			3
			3	1	D		FM	FC	A			2
			4	1	D		F		Ad			3
Ⅸ	6	136	1	1	W		FC	FK	Travel			3
			2	1	D		F		A			2
			3	1	W		FM		A			3
Ⅹ	7	126	1	1	D		F		A			2
			2	1	W		FC		Hd			3
			3	1	W		FM		A			2
			4	1	D		FM		A			2

Table 6　Cさんの Summary Scoring Table

R	29	W:D		13:15	M:FM	5:8
Rej(Rej/Fail)	0(0/0)	W%		44.8%	F%/ΣF%	34.5%/100%
TT	19'44"	Dd%		3.4%	F+%/ΣF+%	40%/55.2%
RT(Av.)	118.4"	S%		0%	R+%	55.2%
R1T(Av.)	12.4"	W:M		13:5	H%	27.6%
R1T(Av.N.C)	15.4"	E.B.	M:ΣC	5:2.25	A%	58.6%
R1T(Av.C.C)	9.4"	E.B.	FM+m:Fc+c+C'	8:1	At%	0%
Most Delated Card & Time	Ⅵ, 27"	E.B.	Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ/R	37.9%	P(%)	2(6.9%)
Most Disliked Card	Ⅱ	FC:CF+C		4.5:0	CR	6
Most Liked Card	Ⅷ	FC+CF+C:Fc+c+C'		4.5:1	DR	6
Σh/Σh(wt)		W-%		0	修正BRS	7
		Δ%				
		RSS				

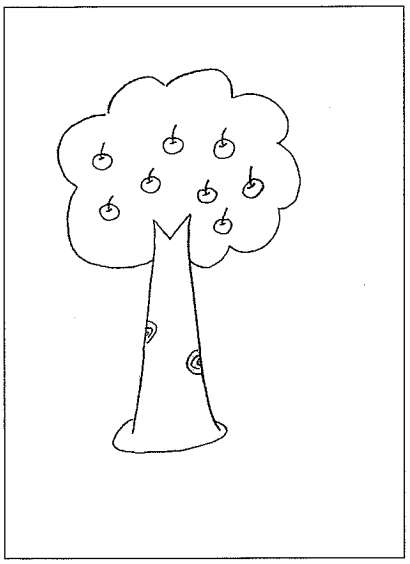


Figure 5　Cさんのバウムテスト (Pre)

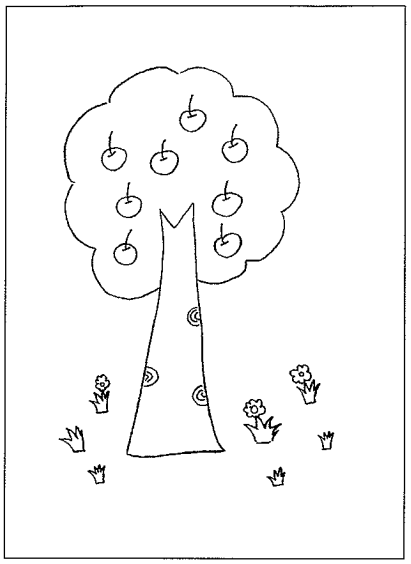


Figure 6　Cさんのバウムテスト (Post)

総合的所見

CMI の領域はⅡであるが、精神的自覚症の値が身体的自覚症の値に比べて極端に高く、そのためⅢの領域近くまで引き上げられている。身体的症状に比して、精神的訴えは若干出ているようである。また、身体的自覚症の中の“習慣”が精神的自覚症の値に近い。これらのことより、器質的な問題は感じられないが、自律神経系の不調としてのストレスを感じていることが予想される。

SDS の値は 50 で神経症者の抑うつの平均値にほぼ等しい。

ロールシャッハテストの反応総数は 29 と年齢相応の平均的な知的生産性を有し、また十分な高さの形態水準もあわせ持っている。初発反応時間を見るとⅣ、Ⅵの 2 つのカードに明らかな遅延が生じている。これに、一次形態反応が 100%であることをあわせて考えると、明確な形に自身の概念を当てはめていこうとする努力がうかがえる。そのために、あいまいな形態の図版であるⅣ、Ⅵでは初発反応時間の遅延が生じたものと推測される。形態水準では、純粋形態反応と一次形態反応を比べると一次形態反応の形態水準の高さが示されている。このことは、形態に他の要素をうまく統合してゆくことのできる能力を有していることを示す。

バウムテストでは、適度に簡略化された描画法が用いられている。大きさも用紙に対して適度であり、行儀のよさ、無難な立ち振る舞いといった社会的な評価を得ることができよう。細部の特徴として、根の方向にも樹冠の方向にも閉じられた幹、幹のうろ（枝の切り跡？)、りんごの実が目に止まる。これらは、社会的な承認や達成を望む一方で、環境に抑圧された自己が表現されているのかもしれない。そのため、本当の自分を外に向けられ

ないといった思いや外界に自分を打ち出すことの緊張、あるいは孤独感といったものを有している可能性が考えられる。

今回の諸テストの結果より、現在、幾分の心理的負担を背負っていることが想定される。緊張場面での腹痛や眠りの浅さ、手足の冷えといった自律神経系のトラブルに訴えが出ている可能性が考えられる。基本的に、決まった型や自分の取るべき役割を優先して行動の指針にしやすい傾向がうかがえる。そのような役割に応じていく能力の高さは十分に有しており、同時に、事象に関わる際の安心感にもつながっているのかもしれない。しかし、決まった型に自分を押し込めていく傾向が強く、時としてそれがストレスとして感じられることも予想される。

4．Dさん、男性、22歳

Table 7　Dさんのロールシャッハテストの分類表

Card	R1T(sec)	RT(sec)	R No.	Pos.	L-Main	L-Add.	D-Main	D-Add.	C-Main	C-Add.	P/O	Form
Ⅰ	8	42	1	1	W		FM	FK	A		P	2
			2	1	W		M		H	Cloth		2
Ⅱ	22	97	1	1	W		FM	FC,FK	A		P	2
			2	2	Wc		M		(H)			2
			3	2	D		FM	FC	(A)			3
Ⅲ	26	110	1	1	Wc		M		H		P	2
			2	1	D		FM	FC	A			2
			3	2	D		M		H			3
Ⅳ	16	115	1	2	D		M		H	Na		2
			2	1	W		M	FK	(H)			2
Ⅴ	5	43	1	2	W		F		A		P	2
			2	1	W		FM		A			2
Ⅵ	19	102	1	1	D		Fm		Obj			3
			2	3	D		F		Obj			2
			3	3	D		Fm		Travel	Sail		3
Ⅶ	40	175	1	1	W		Fc		Art			2
			2	3	D		F		Obj	Map		3
			3	4	D		M		A			3
Ⅷ	17	195	1	2	D		CF		Cloth			3
			2	1	D		CF		Travel			3
			3	1	D		FM		A		P	2
			4	3	D		FM		A			3
Ⅸ	36	175	1	3	D		M	FC	H			2
			2	2	d		M	FC	(H)			2
Ⅹ	15	246	1	2	D		FM		A			3
			2	1	D		F		A			2
			3	1	D		FM		A	Pl		3
			4	1	W		FC		Lds			3
			5	2	D		M	CF	(H)			3

Table 8　Dさんの Summary Scoring Table

R	29		W:D	10:19	M:FM	10:9
Rej(Rej/Fail)	0(0/0)		W%	34.5%	F%/ΣF%	13.8%/93.1%
TT	21'40"		Dd%	0%	F+%/ΣF+%	75%/59.3%
RT(Av.)	130"		S%	0%	R+%	55.2%
R1T(Av.)	20.4"		W:M	10:10	H%	31%
R1T(Av.N.C)	17.6"	E.B.	M:ΣC	10:4	A%	41.4%
R1T(Av.C.C)	23.2"		FM+m:Fc+c+C'	11:1	At%	0%
Most Delated Card & Time	Ⅶ, 40"		Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ/R	37.9%	P(%)	5(17.2%)
Most Disliked Card	Ⅳ		FC:CF+C	3:2.5	CR	7
Most Liked Card	Ⅶ		FC+CF+C:Fc+c+C'	5.5:1	DR	7
Σh/Σh(wt)			W-%	0	修正BRS	22
			Δ%			
			RSS			

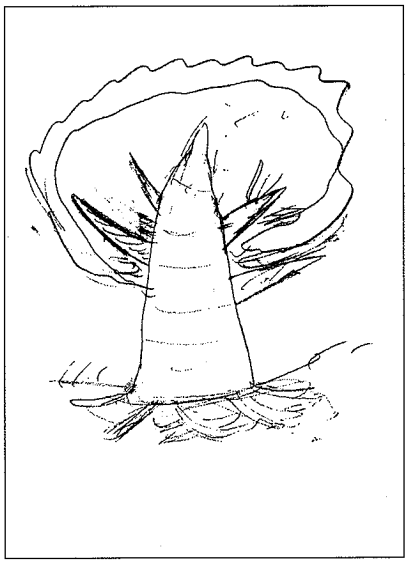


Figure 7　Dさんのバウムテスト (Pre)

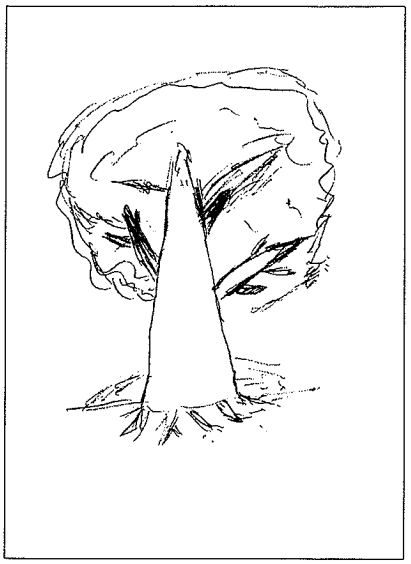


Figure 8　Dさんのバウムテスト (Post)

総合的所見

CMI の領域はⅠであり、5%の危険率で神経症傾向が否定される。自覚症プロフィールでは、精神的自覚症の値が0であることが特徴的であり、また身体的自覚症の値も若干示されているにとどまる。

SDS の得点は 32 で、抑うつ状態につながりのある行動の頻度は低いことが示されている。

ロールシャッハテストの反応総数は 29 と年齢相応の平均的な知的生産性を有し、形態水準も一般成人の平均範囲内にある。反応領域では、部分反応の割合が高く、分割的、具体的な課題への取り組みを示している。各図版の初発反応時間をみると、Ⅰ、Ⅱでの時間の開きがあり、カラーショックを示している。この遅延は、次のⅢでも続いている。初発反応時間が早いカードはⅠ、Ⅴであり、これらのことより、具体的な課題に対しては早い段階での取り組みが可能であるが、あいまいであったり、複数の要因が絡んでいたりする課題に対しては、若干の準備時間が必要であることを示している。この傾向は、一次形態反応よりも純粋形態反応での形態水準の方が良好であること、体験型では内向傾向が強いことをあわせ考えると、外部刺激の統合に際しては、この被験者の認知に戸惑いを生じさせる傾向があることが予想される。この被験者は自身の経験やそこから得られた枠組みに、課題を当てはめて対応していく能力が、優先的に発揮されたものと考えられる。

バウムテストは大雑把な形態でありながらも、随分と手をかけて描かれた印象を受ける。このことは、衝動性や不安を示す指標として解釈できよう。部分的には、幾重にも描かれた根がひとつの特徴である。根の象徴的解釈では、しばしば、性的な衝動、原始的な衝動などとの関連で論じられるが、その観点から見ると、より動物的な衝動に関係した問題性

を潜在的に有している可能性が考えられる。また、幹は上に向かうに従って急激に収束している。そして、枝の表現では、重ね描きや陰影など、他より手がかけられている。このようなことから、社会的な圧迫感やそれに伴う不安を持ち、自分自身をうまく社会で表現できない困難さがここに表現された可能性が考えられる。

今回の諸テストの結果より、現在の精神状態に問題はないことが推測される。社会とのかかわりでは、あいまいなものから何かを見つけ出していく作業よりも、決まった手順やルールを自らに設定して事象にあたるような作業に高い遂行能力を発揮しやすい傾向がうかがえる。自分というものが強く打ち出されており、行動の指針にも自分の内部から湧き上がるイメージに重きをおきたい欲求があるのではないだろうか。そして、社会的な制約によってそれが妨げられるとき、イライラといった攻撃的感情につながりやすい傾向が予想される。

5．Eさん、女性、23歳

Table 9　Eさんのロールシャッハテストの分類表

Card	R_1T(sec)	RT(sec)	R No.	Pos.	L-Main	L-Add.	D-Main	D-Add.	C-Main	C-Add.	P/O	Form
Ⅰ	4	79	1	1	W		M	F	(H)	Obj		2
			2	1	W	S	F		Mask			2
Ⅱ	10	63	1	1	W		M	FC	H	Shoes	P	2
			2	1	W		CF		Food			3
Ⅲ	11	80	1	1	W		M	CF	H	Fire	P	2
			2	1	Wc	S	F		Obj			3
Ⅳ	4	42	1	1	W		F		A			3
			2	1	W		Fc		Aobj		P	3
Ⅴ	10	58	1	1	W		F		Music			2
			2	1	W		FM		A			3
Ⅵ	6	18	1	1	W		FC'		A		P	2
Ⅶ	7	40	1	1	W		F	Fc,Fm	(H)	Hair		2
										Stone		
Ⅷ	9	70	1	1	D		FM	CF	A	Na	P	2
			2	1	D		FC		Travel	Sail		2
Ⅸ	10	47	1	1	W		CF	mF	Lds	Fair		3
Ⅹ	7	56	1	1	W		M	FC,CF	H	A,cloth		2

Table 10　Dさんの Summary Scoring Table

R	16	W:D		14:2	M:FM	4:2
Rej(Rej/Fail)	0(0/0)	W%		87.5%	F%/ΣF%	31.3%/87.5%
TT	9'13"	Dd%		0%	F+%/ΣF+%	60%/71.4%
RT(Av.)	55.3"	S%		0%	R+%	62.5%
R1T(Av.)	7.8"	W:M		14:4	H%	31.3%
R1T(Av.N.C)	6.2"	E.B.	M: ΣC	4:3.75	A%	25%
R1T(Av.C.C)	9.4"	E.B.	FM+m:Fc+c+C'	2.5:2	At%	0%
Most Delated Card & Time	Ⅲ, 11"	E.B.	Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ/R	25%	P(%)	5(31.3%)
Most Disliked Card	Ⅴ	FC:CF+C		1.5:3	CR	9
Most Liked Card	Ⅶ	FC+CF+C:Fc+c+C'		4.5:2	DR	7
Σh/Σh(wt)		W-%		0	修正BRS	8
		Δ%				
		RSS				

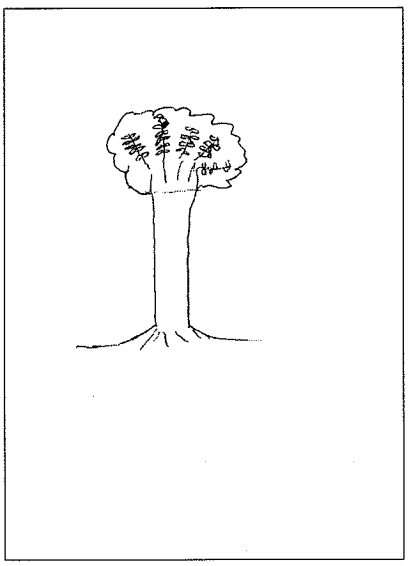


Figure 9　Eさんのバウムテスト (Pre)

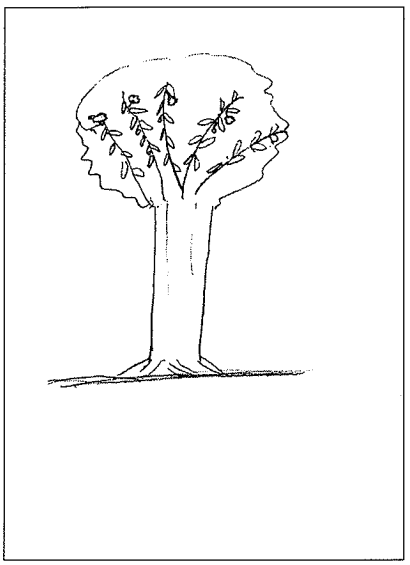


Figure 10　Eさんのバウムテスト (Post)

総合的所見

CMI の領域は I であり、5%の危険率で神経症傾向が否定される。自覚症プロフィールでは、身体的自覚症が低い値で少しずつ表現されているのに対して、精神的自覚症の値が 0 を示している。このことは、精神的な側面に対しては身体ほどの訴えを認めない傾向を潜在的に有しているのかもしれない。

SDS の値は 28 であり抑うつ傾向としては、平常者の範疇でも低いほうである。

ロールシャッハテストの総反応数は 16 と低い。そのため、統計的指標の解釈はあくまでも参考程度にとどめておく必要がある。反応領域は全体反応が多く 87%を占めている。今回のテストでの反応数の少なさは全体反応へのこだわりによるものかもしれない。そうした中、形態水準としては十分な高さが保たれており、純粋形態反応よりも一次形態反応の方が形態水準の高い傾向にある。また、初発反応時間では I II 間での反応時間の遅延はあるが、全体として 4 秒から 11 秒と早い時間での反応がなされている。以上を含めると、抽象的、全体的に課題に取り組んだ姿勢がうかがえ、それに対する知的能力、統合能力は高いものであることが推測される。さらに、全体反応へのこだわりが知的生産性を制限したと解釈したとしても、VIIIでは部分反応がなされ、課題の難易度に応じた対応の切り替えをおこなうことができる視点の柔軟性を持つことが推測される。

バウムテストでは、単線の枝が表現され、これは未成熟を示す指標ともいわれることがある。樹冠内部に描かれた葉や花（？）は密集的に描かれており、このバウム全体としては不釣合いな印象も受ける。これは、社会や対人関係においてのある種のこだわりを持つ傾向を示すものであるかもしれない。また、2 枚目の根元は地面の潤筆によって地平が描か

れており、原始的な衝動（怒りなど）を抑え込もうとする表現の現われではないかと推測される。

今回の諸テストを総合すると、現在、健康的な精神状態にあることが推測される。物事を全体的な視野から捉え、それに対してさまざまな情報を統括して取り組むことのできる高い能力がうかがえる。また、てきぱきとした段取りのよさ、課題に応じた対応の柔軟性も備えていることが予想される。しかし、理想や目標といったものに対してのある種のこだわりや幼さも感じられ、そのこだわりが時として能力の制限につながる可能性が考えられる。

Table 11　５名被験者の検査データ一覧

		ID	A	B	C	D	E
		SEX	F	M	F	M	F
		AGE	21	22	21	22	23
CMI	身体的自覚症状	目と耳	3	2	3	1	1
		呼吸器系	0	0	0	0	1
		心臓脈管系	3	1	1	2	1
		消化器系	1	2	2	3	3
		筋肉骨格系	0	1	0	0	2
		皮膚	1	1	2	0	1
		神経系	1	2	0	1	1
		泌尿生殖器系	2	1	1	0	1
		疲労度	0	0	0	0	0
		疾病頻度	0	0	0	0	0
		既往症	2	1	0	2	1
		習慣	2	0	3	0	1
		C. I. J	3	1	1	2	1
		計	18	12	13	11	14
	精神的自覚症状	不適応	1	0	7	0	0
		抑うつ	1	0	2	0	0
		不安	0	1	3	0	0
		過敏	2	2	3	0	0
		怒り	1	0	4	0	0
		緊張	1	2	2	0	0
		計	6	5	21	0	0
		領域					
SDS			28	36	50	32	28

			A	B	C	D	E
ロールシャッハ		R	42	17	29	29	16
	Time	RT(Av.)	90.8"	77"	118.4"	130"	55.3"
		R1T(Av.)	9.7"	23.1"	12.4"	20.4"	7.8"
		R1T(Av.N.C)	9.4"	27.2"	15.4"	17.6"	6.2"
		R1T(Av.C.C)	10"	19"	9.4"	23.2"	9.4"
		Most Delated	Ⅷ, 12"	Ⅳ, 92"	Ⅵ, 27"	Ⅶ, 40"	Ⅲ, 11"
	Location	W:D	34:7	4:13	13:15	10:19	14:2
		W%	82.9%	23.5%	44.8%	34.5%	87.5%
		D%	17.1%	76.5%	51.7%	65.5%	12.5%
		Dd%	0%	0%	3.4%	0%	0%
		S%	0%	0%	0%	0%	0%
		W:M	34:10	4:6	13:5	10:10	14:4
	EB	M:ΣC	10:10.75	6:1.5	5:2.25	10:4	4:3.75
		FM+m:Fc+c+C'	10.5:3.5	4:1	8:1	11:1	2.5:2
		Ⅷ+Ⅸ+Ⅹ/R	29.3%	47.1%	37.9%	37.9%	25%
		FC:CF+C	3:9	1:1	4.5:0	3:2.5	1.5:3
		FC+CF+C:Fc+c+C'	12:3.5	2:1	4.5:1	5.5:1	4.5:2
		M:FM	10:10	6:4	5:8	10:9	4:2
	Form	F%/ΣF%	19.5%/82.9%	23.5%/94.1%	34.5%/100%	13.8%/93.1%	31.3%/87.5%
		F+%/ΣF+%	12.5%/47.1%	50%/43.8%	40%/55.2%	75%/59.3%	60%/71.4%
		R+%	39%	41.2%	55.2%	55.2%	62.5%
	Content	H%	23.8%	35.3%	27.6%	31%	31.3%
		A%	31%	35.3%	58.6%	41.4%	25%
		At%	0%	0%	0%	0%	0%
		P(%)	6(14.6%)	4(23.5%)	2(6.9%)	5(17.2%)	5(31.3%)
		CR	11	6	6	7	9
		DR	7	6	6	7	7
		修正BRS	12	-5	7	22	8